

麻生路郎主

川

柳

の

証



七丹號

Pensoj flugas trans la land-limono

りとびきに

ニキビ



の等虫京南・蚊・蚤
! 時いユカで虫毒

美
顔
水

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、
殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重
寶がられてゐます。
★ニキビ吹出物に非常によく効くので
大評判の薬です。ニキビや吹出物でお
困りの方に大きな喜びの糧!
お勸したい薬です!
ゼヒ

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	.

阪大・京東

館天順谷桃

不朽洞雜筆

麻生路郎

二十四時制

鐵道省が二十四時制を採用することになった。この改正は遅いくらゐるもので、まことに結構な改正だと思ふ。

薄暗い列車の中で、午前や午後の細字や大字に神經をなやましてゐたことは、まことに愚かな辛抱だつた。電報で一々午前や午後をことわる必要も無くなつた。

一般の家庭でも同時にこれに倣つて改正する必要があらう。何グラムとか、何センチとかが市場で憚んだやうな惱みが伴はぬだけでも朗らかだ。時計などもこれに倣つて改正して欲しい。一々引算などをしないやう

に。

「もう二十三時半だ寝るとせうか」と云ふことになる、感じの上では随分遅くまで起きてゐたやうに思へるが、それもすぐに馴れつことになるだらう。

「今鳴る時計は七時半、あれに遅れちや重發音」といふらつば節があつたが、今鳴る時計は十九時半でも唄つて唄へぬことはないが、そこまで改正の必要はない。歴史的ならつば節として保存しておけばいいだらう。

陸軍でも今は二十四時制を實施してゐると聞くが、そうまらしく改正せずに、メートル法を改正したやうに全國一齊に改めた方がいいと思ふ。ずつと以前に詠んだ

酔うて來て

既に零時をすぎた水

などの句は、午前だの午後だのとことわらなくても、一讀して判る句だが、今後川柳の上にも二十四時制があらはれて、來て時間的な句に的確さを示すこととならう。音律の上で多少無理な句が出来るかも知れぬが、それは作家の腕に俟つより仕方があるまい。案外巧い省略などが行はれるかも知れない。

額縁と畫家

猿にも衣袋といふ諺がある。貧弱な畫でもいい額縁に入れればよく見えると云うのである。それは一つの錯覺にすぎないのであるが、そつとした考へ方を寧ろ無視して常識として誰も疑はない證據には、アマチュアの畫家でも、金持だといふ條件に恵まれてゐれば、貧弱な畫を素派らしい額縁におさめてとくとくとしてゐるものだ。

奈良にKといふ畫家がある。

私はふとしたことからこの畫家を訪ねた。その時の談に、

「近ごろ珍らしい、いい額縁を手に入れましたので、それに自分の畫を入れました。この額縁だと畫が素派らしくよく見えるだらうと内心得意で、その畫を眺めました。ところが期待は全く裏切られて、私の畫が見劣りするのです。そして額縁

の方は憎らしいほど光つてゐます。先輩や友人も、いい縁だねと二見して額縁を褒めました。が畫については何も云つて呉れないのです。私は私の畫をとりはづして、そのあとへ××××の複製を入れて見ました。ところが複製でも××××の畫は傑出して光つてゐます。額縁に負けた私は考へさせられました。私はなせもつと早く立派な額縁を手に入れたかつたのであらうと残念に思ひました。私は今、その額縁へ生地の儘のカンヴァスを

入れてゐます。この次にお目にかかるまでには、必ずその額縁に入れられる畫を描きたいと思ひます」と云つた。

斯く云ふ彼の作品は相當なものであるが、小さな成功に満足しないで、額縁への挑戦は將來の彼を約束つけるに充分であらう。自分はこの若い畫家の描く畫が、その額縁を壓倒する日の一日も早いことを祈りながら奈良を辭した。

これを一畫家の話として聞き流さないで川柳人の一人一人に斯うした精進ふりがのぞましいのである。日露戦争を知らなかつた學者があるが、それはほどでなくとも川柳人は川柳人としての精進がある筈である。便乘に寧日のない人の句が、日本の文化に何をつけ加へることが出来るやう。

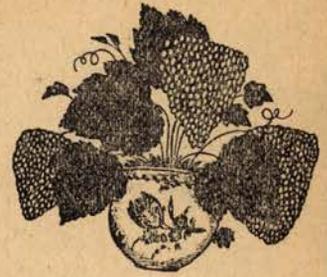
川柳雜誌 七月號目次

表紙 (白雲の漣) 福井哲撮影

不朽洞雜筆	麻生路郎	(一)
川柳寫眞(夏祭) 攝影福井哲	句一 大西 八歩	(三)
都心隨筆	泉 融々	(二)
民語布哇八景の唄	麻生路郎	(四)
近畿の大和篇(五)	小山 文三	(三)
隨筆かつぎ屋	梅本 東山	(一〇)
武玉川五篇研究(二)	榎子 省二	(一〇)
東京放語	福田山雨樓	(三)
初等川柳講座(六)	麻生路郎	(一〇)
でんしや	須崎 豆秋	(七)
川世界史(二五)	戸田 孤蓬	(五)
投句前後	奥村 丹路	(七)
月川柳一卜筋	神楽 丹路 豆秋 孤蓬 一笑	(四)
河の川柳に現はれた童	前田 五健	(三)
川柳解題と例句	麻生路郎	(三)
★		
近作柳釋	麻生路郎選	(二)
川柳塔	麻生路郎選	(二)
同舟近詠	諸家	(七)
一占領	姫田夕暹	(二)
集硯	長野文庫選	(二)
各地柳壇		(三)
川協・柳界展望	廻轉椅子	(三)
飛燕往來		(二)
社關係の人々		(三)
川柳類題索引		(二)



(員會洞朽不) 氏峯白岡宮の護を北



都 心 隨 筆

泉 融 々

いくら書いても氣に入らない習字を、ふと裏返しにして見て、おや、まんざらでもないな——と思ふことがある。

これは誰れにも覺えのあることであらう。

へたな字を裏返しにするとなぜよく見えるのか。納得のいく説明はできないが、アラが隠れるといふことも一おうの理由になるのではないだらうか。

しかし自分の字を裏返しにして悦に入つてゐたのでは上達の見込みはないであらう。たゞ、時をり思ふことは、人にたいして厳しい見かたに傾きがちなきに、もしその人を裏返しにして見る方法があつたならば——といふことである。

歴史上の人物はたいいて裏

返しになつてしまつてゐるやうだ。表に返せばその人々にもずるぶんアラはあつたらしい。

菅原道眞は怒りつぽかつたと云はれ、頼山陽は朝寝だつたらしい。佐藤一齋はチャツカリ屋で佐久間象山は短氣だつたといふ。近ごろの人でも野口英世がかなりだ、つ子だつたといふことはすでに裏返しになつて忘れられてゐると思ふ。

われ／＼が現につきあつてゐる人々のアラをあまり氣にしてはいけないのかもしれない。鼻もちならぬと思へる人でも、いや、憎らしいと思へる人でさへも、裏返しして見れば案外まんざらでもないのはなからうか。

裏返しといへば思ひだすこ

とがある。

細君に先立たれて、二度目の結婚をした人に友人が感想を求めたとき、かれは——足袋を裏返しに穿いたやうな氣がした——と答へたといふ。けだし禪問答としても満點であらう。

この話を思ふたびに浮かんでくるのは啄木の次の歌である。

よこれたる足袋はくときの氣味わるき思ひに似たる思ひ出もあり

世の中にもつと寛容の徳が行はれてほしい。ことに日本ではそれが少ないやうに思はれてならない。大東亞の指導國としては、この徳を大いに養ふ必要があるであらう。南方諸民族に多くの「ベカラズ」で臨むとすれば、しくじるにちがひない。

一茶が、たしか北陸で詠んだ句がなつかしく思ひ起こされる

けふからは日本の醜を樂に疑よ日本としてはどこまでもこの氣持ちを持ちたいものではないか。

五六年まへにわたくしに忠告してくれた人がある。

「あなたの寛容の徳は、すこし過ぎてゐはしないのでせうか。寛容はたしかに美德です。しかし、あなたのばあひそれはむしろ禍ではないでせうか。わたしは腹だたしさをさへ感じます。」

このことばにたいしてわたくしは笑つて答へた。

「ありがたう。」

その人は鸚鵡返しに、それでも笑ひながら云つた。

「それ、そのことばがあなたの必要以上の寛容を現はしてゐるのですよ。」

ところが、近ごろになつて、その同じ人がわたくしに向かつてしみ／＼と云つた。

「かつてあなたの寛容の美德にたいしてあれほど憤りを感じたわたしが、このごろではそれがさほど氣にならなくなりまして。」

時の経過が彼れに許したこ

の生長をわたくしは好ましいものと思つた。

かくいふわたくし自身、十年まへには人を許さな過ぎるいとも厳しい人間であつたことを夢のやうに思ひ出す。そして今なほ、寛容の底に一脈の憤りを藏してゐることをわたくしは知つてゐる。

いたづらにたいしてすぐ腹をたてる人がある。なるほどいたづらにも無邪氣なものばかりでなく、なか／＼罪の深いものもある。だが、いづれにしても高がいたづらではないか。腹をたて、くたびれるよりは笑つてすますに限る。寛容の徳の應用がこゝにもある。

アメリカ人は今は敵性國人であるが、個人々々としては寛容の徳を具へたものが多い。いたづらをされても、むしろそれを楽しむといつたふうがあるのは學んでいゝことであらう。

アメリカ東海岸のアトランティック・シティの盛り場での體驗をひとつ。蠟細工でこしらへた歴代の大統領の人形を並べた見世物小屋があつた。ところがその入口になんと「アドミツション・フリ

イ(入場無料)と書いてあるではないか。ゾロ／＼とはひる人波にもまれて筆者もおもしろ半分にはひつて見た。

そして見終はつて出ようとする、出口のところ、「出場料五十仙」とあるので二度ビツクリ。日本人なら、こゝで大いに憤慨してそのインチキを責めるところであらうが見物人どもは騙されたことを興ずるかのやうに、笑ひながら出場料を拂つてゐた。

いたづらといへば友人に聞いた話を思ひだす。その友人は頭を丸刈りにしてゐるのだが、そのいはれ話である。

かれがN市にゐて上京しようと思つてゐたとき、東京で役人をしてゐる友人から手紙が来た。その中に、このごろ東京では役人は全部丸刈りになつた、たゞ頭に禿のあるものだけが特に許しを受けてのばすことができる、君も役人のはしくれなら、上京のをりは丸刈りにして出てくることを忘れぬやうに——とまことしやかに書いてあつた。

かれは友の親切に感謝していづればN市もさうなることだらうからと、さつそく丸刈りにして上京してみたが、それがまつかな嘘であることが

わかつた。癪にさはつたが、のばすのもめんどうなので、そのまゝ丸刈りにしてゐるといふのである。

そのかれがその騙した友人を騙しかへした事件がある。その友人が用事があつてH市へ出張することになつたのでかつてH市にゐたことのあるかれに旅館のいゝのを知らせてくれといつてよこした。これ幸ひと喜んだかれは、さつそく向西館といふのを紹介してやつた。友人は驛につくとすぐ車をやとつて向西館へと急がせたところが、それは火葬場だつたといふ。もつともこの手はもう古くて今ではあまり通用しないといふ。

似たやうな話がある。江戸つ兒のKさんの家へよくまちがつて電話が掛かつてくる。それがどういふものか同じ人から性懲りもなく何度でも掛かつてくる。そこでKさん一策を案じ、まちがひの電話と氣がつくと勢よく云つたものだ。

「へい、葬儀屋でございませ。毎度ありがたうございませ。」
まちがひの電話はそれ以来あまり掛からなくなつた。

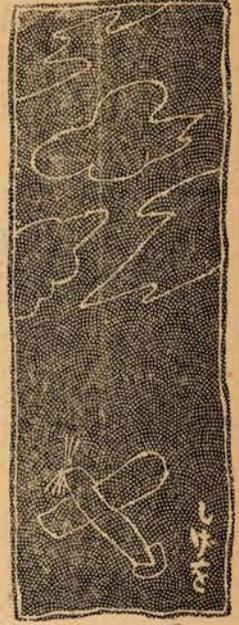
前にいつた丸刈りの友人は柄が大きいためかよくその職業をまちがへられるといふ。初めて土地の宿についたとき、宿のものが馴々しくもみ手をしながら「だんな、けふは私服で……」といふ。をかしいと思ひながら「いや、僕はこゝは初めてだぜ」といふと、番頭氏ひとり呑みこみに頷きながら

「いえ、もうわかつてをりませ—
といふ始末なのですつかりてれてしまつたといふ。宿といへば五六人づれで旅行したとき、一行の中に子爵がひとりゐる。食事のときにもいやがるのを何とかかといつて上座に据えてしまふ。かれは口をきかせるといかにも華族さんらしくお上品だが、ちよつと見たところは、どう見ても古道具屋の番頭ぐらゐにしか踏めない。

そこで幹事役のまめな男が女中に、
「あの方は子爵さんだからそゝうのないやうに……」と眞顔でいへば、女中は穴のあくほど眞正銘の子爵の顔を見てゐたが、やがてふきだして幹事に向かつて「ご冗談でせう。」
本當のことを云つても信用されないで、その次の宿から幹事は子爵を平民なみに扱ふことにしてしまつた。
(十七、五、三十一)

民 布哇八景の唄

- 戀しや、つれなし 捨れば辛し
- ペレの女神の キラウエア山
- 胸に燃く火か 御神火か
- ヒロの椰子島 風風や岸で
- 誰に見せよとて アノ水鏡
- うつしや銀蛇が 連れ合ふ
- 月も涼しい ワイキキビーチ
- 女波男波が 騒ぎや赤い
- 沖の出船の 灯が揺れる
- ムアヌパリから 峠油越せば
- 谷は名物 お天候時雨
- 木練無さをに 日が暮れる
- 忘れられない 名もカラウババ
- 盡きぬ名残りに ウクレレ聴けば
- 朽ちた獨木舟に 月がさす
- 鐘は鳴らねど お山はみどり
- 初日拜みに 日の宮様へ
- 登りや心も ハレアカラ
- あれサ、ワイメア 多情な谿よ
- 暮れも夜明けも 景色を變へりや
- 別れたワヒネが 氣にかゝる
- 見やれ鳴立つ ハナレー湖を
- 夕日うけく 飛魚が飛ぶよ
- 宵にや風ぐやら 時化するやら



川柳の大和篇 (五)

麻生路郎

(三) 飛鳥坐神社

★飛鳥大佛から東へ三丁ほどの鳥形山に村社飛鳥坐神社がある。主神は大國主命の御子、事代主命であつて皇城に近い守護神として創建されたのであるが、そのち大小の神祇三千餘座を攝社末社として合祀する由緒の深い式内社である。また笠縫邑の傳説地でもあつて「元伊勢」とも呼ばれ朝廷の崇敬も深かつたが火災などのために衰微したのである。しかし衰微の原因は外にもあつた。それはこの神社には昔から氏子といふものがなかつたから、社家である飛鳥家の衰微は直ちに飛鳥神

社の衰微を意味した。現在では飛鳥家の當主が社掌でもあり、たつた一人の氏子でもあるので、古來由緒の深い當神社の昇格顯揚に努められてゐる。

★飛鳥神社の社家、飛鳥家の祖先是遠く事代主命の第七世直比古命にはじまつて、崇神天皇磯城瑞籬朝七年、同命に「飛鳥直」の名を賜はつたと姓氏録にも載つてゐる。當主飛鳥弘訓で八十六代になるが、その悉くが男系をもつて終始してゐるといふ名家で、四代の飛鳥佐井比古は日本武尊に従うて熊襲誅滅軍に出征、六十代の飛鳥康治は正平元年、後村上天皇の

御召によつて、足利軍を河内に討ち壯烈な戦死を遂げてゐる。

★社寶としては、特に巨大な古鏡が異彩を放つてゐる。

★松の芭に御幣を巻いて植ゑる御田の神事は朱鳥元年(紀元一三四六年)以來、毎年舊曆一月十一日に嚴修されてゐる。この神事では、神樂殿でお太福(天鈿女命)と天狗(猿田彦神)の面を冠つて男女にかたどつた行事が子寶を授けられるといふ信仰で今でも行はれてゐる。

★又社殿の横には陽石があり、珍筈がある。

★近ごろ、境内望景の地に青少年心身錬成の道場が建設された。

★飛鳥坐神社を詠んだ今人の川柳を左に記るさう。
寂しさは氏子のないといふ社
波夢造

國寶のやうに陰陽石を指し
あすか鍋大和三山閉め切つて

(四) 酒船石

同

★酒船石は飛鳥坐神社の南方三丁の丘上(高市郡高市村岡)

にある。高さが三尺五寸、長さ十三尺七寸、幅六尺で、ほぼ楕圓形である。平面に三箇の溜と七條の細い溝がある。往古神酒を造つたものと云はれてゐる。

★酒船石を詠んだ今人の句。
酒船を上は一寸臭いでみる

お買物は三越
定休日、毎月曜日
營業時間 9時—5時半
大坂三越
三越

酒船の雨後はすこし水を溜め
解説が無ければ礎石かと思ひ

同

(五) 岡寺

同

★岡寺は岡寺驛から東二十二丁、岡村の山腹にある。寺

號は東光山眞珠院龍蓋寺と稱し眞言宗豊山派に屬してゐる。西國三十三所第七番の札所で、詠歌は「けさみれば露岡寺の庭のこけさながら瑠璃の光なりけり」である。

★本尊は一丈六尺の如意輪觀世音(塑造)の坐像で弘法大師の作である。明治三十四年に國寶となつた。

★寺は人皇三十八代天智天皇の勅を奉じて義淵僧正の創建である。義淵僧正は俗姓を阿刀氏といひ、天智天皇の御子草壁皇子と共に岡宮で養育され、僧となつて後、入唐留学、碩徳の開へが高く、奈良朝の名僧、行基、道滋、良辨等に師と仰がれた人である。

★義淵僧正の墓は境内の東南の丘にある。僧正は神龜五年十一月五日にこの寺で入寂されたのである。僧正自作の乾漆像(國寶)は奈良博物館にある。

★境内に龍蓋池といふ小さな池がある。この池に昔、悪龍が棲んでゐて附近の惨害が甚しかつたのを義淵僧正が法力で封じ、大石に阿字を書いて、再び出現しないやうに、

塔柳川



=選郎路=

兵庫縣川西市 戸倉普天

東京に行つた印しのわさび漬
今日も驛の電氣時計の故障札
託兒所が引取つて行く田植時
朴さんもかしこまつてる選舉場

大阪府高石町 米本貴志子

子のために生きる命で晝を習ひ
神經は針に似た夜の桌啼く
昔なら事だスタンドランプ倒け

尼崎 水谷鮎美

目薬を子の本棚へ置き忘れ
水をやる子の影茄子花ざかり

大阪 橋本緑雨

麥秋に狭い内地が目立つ也
名物の看板だけが残る也
工人の暇に草花いちぢる也

橋本 福田山雨樓

萩原博君片足を國へ擡げて凱旋

征くときのまゝの童顔擔架にゐ

長男北支から第一報を寄越す

大陸の猛訓練が字に滲み

よき便り膝で讀みく鋸使ふ

太陽と青葉の下で鋸使ふ

隣組こゝらの夫人皆姪る

苧麻の芽に微風南を語るらし

妻と子が植ゑた茄子が童話めき

奥野野郎子女史撰

情熱の歌の強さが偲ばるゝ

大阪 西田艸樂

腹見せて蛙も寂滅爲樂なり

逝く春が惜まりよまいか汗性で

配給品濁世の長屋譲り合ひ

尼崎 奥村丹路

女なり女なりお詫び申しあげ

夕白し人亡ひし家を過ぐ

藤の下わが情熱はどこへいた

安産のお下髪に結うて少女めき

展望車田植旺んな中をゆく

豐滿と少女みづから知りそめる

落下傘部隊を讀ふ

死すまでは死なじ落下傘萬朶

近況にかへて(三句)

あはや子は庭へおちんとして笑ひ

ふたりの子眠りなるほど晝下り

とげくんと子を叱る聲きいてゐる

堂嶺張繁口 岩崎柳路

九軍神吾が民族の底力

要望はあれど止そうよ時局柄

又一つ増えた聯盟にも加名

チャツプリンの賞めたバリ島に吾が勇士

見送つて年寄りやはつたなと話し 大阪 大西八歩

眼差が純情すぎて云ひそびれ

ひまつぶしとは殺生な蠅たゞき
夏衣裳乞食も着替持つてゐる

大阪府高石町

戸田 孤 篷

草と辨當函とブランドス敗れたりし
貞操論先生だまつてきいてゐる

漢字禮讃そのくセルビも忘れない

布 播

上田 翠 光

★
休閑地などと思へぬ麥の出来

妻 入 院

夢浅し白一ト色に覆はれて

大阪 井上 湧 三

診察場風景

急に來たものでせうかと訊される
戦果聞くだけの御楯ですみません

燃り戻す話の窓へ雨がふる
本質的に分ないわと女專いふ

ラツシユアワ一傘の雫をうけて乗り
南方赴任圖らずも氏がやつてくる

乳母車押して夫人は繪にされる

救急車人轢きそうな走りやう

年寄りに晝のニユースを聞かされる

夢多き時だ娘と見遁さず

敗兵を英語で裁くじれつたさ

大阪 八竹 正 柳

親類はみな金がない仲の好さ

草を被た兵の寫眞へ勵まされ

失業の俺へきつち朝がくる

養子の妻の厚化粧かな

子を抱いてメダカの色もなつかしく

三百六十五日火叩き天を向いたまゝ

日本の餘裕吳服部積み重ね

京都 明石 柳 次

電氣マツチ壊れたまゝで梅雨に入り

大阪

市場 沒 食子

阪大藥局へ見學

見學はツボンと邪魔なとこへ立ち
古本で缺席がちで首席にて

ハイラル

宮岡 白 峯

夜行軍子供顔が見えてゐる

軍刀を抜きたひ春の空の色

糸巻もピストルもある昨日今日
長靴も履かして貰ふ日の日記

松本の四季の風景

松本 石曾 根 民 郎

春の城山

はるけくも旅愁に霞む山多し

夏の籠手

盆唄の子から夜店の灯が揃ひ

秋の護國神社附近

めぐりあふ友の子がもつ秋の花

冬の松本城

雪もよひ城のむかしを語る夜ぞ

大阪 正本 水 客

食堂車コーヒのゆれへ顔をよせ

夜道きし眼に玄關の灯がひろがりぬ

長逗留おんなの方も釣になれ

そろばんを持つてる旅がわびしまれ

混雑の足にあたるは軍刀か

サーピス料一割と云ふ酒を注ぎ

鍊成會所感をむりに書かされる

喧嘩又喧嘩で年子育つて來

バタ燒の匂ひ子のある家庭なり

撃沈の印給仕がつける役

目薬も持つて女は旅にゐる

豊中 黒川 紫 香

犬一つ淋しくピルの暮れを抜け
三等車また驛辨の空を踏み

大阪 丸尾 潮花

小屋はねて去ぬ掌が雨を受け
女専出て理想にとほい親をもち
大學を出すまで母も働く氣
暇もろて歸る女中の薄化粧

大阪 北川 春巢

忙しい證據のやうにひげがのび
科學的台所と云ふ台秤

第二國民兵訓練に應召

新米の斥候と見て犬が吠え

大阪 尾崎 方正

坊ン坊ンは麥の穂に似たとがりやう
生めよ殖せよ寺に襪襪が干されてゐ
お化粧が綺麗とほめる手もあつた

臭いものを蓋するやうに法が出来
榮養だホルモンだ初老狼てたり
子を膝に落着かざるを得なくなり

大阪 西 尾 栗

チト叱りなはれと父ちやん叱られる
お隣りの音に愕く家に住み
此頃は田舎田舎といふてくれ

大阪 濱田 久米雄

女性史へ燦然として人柱
家計簿の備考は切符制ばかり
濠洲はひとりぼつちの波さわぐ
動搖の印度へ暑い日がつじき

西宮 西川 愁水

出雲では神有月と言ふ相な
茶柱をそつとかくして適齡期

出雲大社参拜

凱旋の翌日山へ行く男

大阪 中内 翠芳

五月雨に濡れてツバメの早やさなり
制服の父へ子供はついて来ず

甥の戦死へ

腹既に覺悟の遺髪送つて来

下関 多田市 多樓

年かいな生活かいなお茶を好き
どうかなるとは親友の有難たし
平凡な者が皆勤賞を取り
献金をする汗のシャツちびた下駄

南方 大森 風來子

椰子のあるとこまで歩く星月夜

占領地官民兵隊合同運動會

惜敗の背に英語の世辭を聞き

大阪 夷 一笑

大阪の水につかつたしじみ貝
勝手口しやくにさわればなほ開かず
お玉杓子つくく見ればグロテスク

お化粧セツト目玉をむいてもどつて来
萬年筆の先がかわいてる暑さ
新らしき時代この目で見て置こう

紅多呂君へ

變つたね變りましたと擧手の禮
しやべるだけしやべつたあとで擧手の禮

文樂座所感

くろんぼうも手傳ふて人形はだをぬぎ
忠信の妖氣に満ちた早がわり

京 城 鈴木 石鹿

内地への旅にバカチの嵩はれる

北鮮への旅

浮遊機雷あるとは見えぬ隠やかさ

國語常用獎勵(於半島)

鮮人の乞食國語で錢を乞ひ
旅艸女ごゝろのこま／＼と

大牟田 高田抱逸

移轉料みこんで庭の樹をふやし
鮎の味故郷の味となつて泌み
恩給の囑託だのにコセついで
大家族餘るは衣料キツブだけ

下關 國弘半休

五月二十六日鐵道官舎に移轉

隣組別な氣兼ねがあるらしい
同じ軒子等の行儀も良くならう
七月一日より關森貨車航送停止さる

完成へ船などと云ふ得手勝手
海底もやつぱり科學には勝てぬ

尼崎 小林文月

空席があるに中學生は立ち
皆勤の家にモンベの妻がある

尼崎 飯尾寄與史

葬儀屋に公定値段聞かされる
蚊帳を吊る日がどうこうと母は老け

大阪 徳永雅美

サービスに突きそこなうたゲーム取り
知らぬ子が二人も出來た友を訪ひ

終電に乗つて昆布を口へ入れ
轉業にビルから見下ろす身とは成り

西宮 谷口綠葉

純綿も屑屋なんとかけちをつけ
退官へ大きな口が貰ひに来
香典の勘定ねむい顔が寄り
お化粧も出來たに子供寝てしまひ

あゝ少し横になりたいたいと妻

五月三十日祖父死去

葬列がけしの實搖れる徑を行く

大阪 武部香林坊

奉天にて

滿洲の鴉はやはり黒かつた
成程と思ふ廣さへ大豆の芽
横丁へ這入れれば女先きになり
牛曰く人に吞ませる乳でなし
よい趣味の話で御通夜明けかゝり

新京にて(三三)

エトランゼ馬車の鈴をなつかしみ
世智辛く馬ぐそさへも見つからず
漢藥屋薬も一緒に吞ませとき

山口縣小郡町

長野 井蛙

鐵回收何處までつゞく街の鑛山
御用聞き今日は茶ツ葉服で列に居り

大阪 清水白柳子

木材の事にて高野へ行く

營林署耳をすませば河鹿鳴く
釣好きが居て紀の川を渡らせす
黄昏にゲートルで來た奥の院
通り雨ついで詣りのばちと知り

下關 櫻川不水

御聖慮へ泣く涙あり男なり
飛び乗つたお僧の衣ひら／＼と

堺 麻生葎乃

男同志の社交に葱の禮もいひ
戦はぬ國の色なるよもぎ餅
點數のかさむ安物ばかり買ふ
鋭鋒はおひかへ召され思想線
督促のペンと思へば指痛く

武玉川五編研究 (三)

梅 本 塵 山
森 東 魚
子 省 二

(19) 見詰ても戀しい足りにならぬ空

省二 前句事情ならむ。此句の如き感じも成立ちはするが、又、せめて空でも見詰めて居らねば、やるせらい心持ちが過ごせぬ。さすれば十分戀しい足しになる。(燈臺守の娘が空を眺めては、淋しい思ひの中で雲の去來を樂しむだといふ話もある)。

東魚 やるせなき思ひにふける、若き女性が思はれる。竹久夢二描く趣が聯想される。

塵山 配所に於て月を眺めると、同じであらう。

(20) 雲駄の徳の貞を釣り出す

東魚 雲駄をちやらつかせる。窓から心當てにしてゐた美しい顔が覗いた、有難い拜んだくと云ふ心持ちの場合か、或は、悪友を誘出す場合であらうか。

塵山 雲駄の徳一とは、面白からぬ語である。

省二 十四字詩だから詞に無理がある。「釣出す」などの響が、悪仲

間の方を思はせはせぬか。

(21) 目醫者の顔が眞先に見へ

省二 感激。感泣。(白内障患者の私も、やがて手術する事になれば、こんな場面となる)。

東魚 醫者も患者も、共に喜びであらう。

塵山 歡喜雀躍、感涙も自然に湧出するであらう。

(22) 身代を織込んだ所か惣桔梗

東魚 惣桔梗は、遊んだ揚屋の紋が、皆桔梗だとも云ふ意であらうか。(夕霧伊左衛門に關したものはなにか。京島原の桔梗屋、大阪へ引越す。この時夕霧下り評判となりし事「みをつくし」に見ゆ)

塵山 桔梗屋といふ揚屋ならば、それを紋章としたであらう。明治時代にも島原に、桔梗屋といふのが有つたと記憶する。

省二 前二解の如しと思ふ。

(23) 京大坂ハ江戸の引出し

省二 抽斗の中には、何物かある

るわけ、京大阪は物資が豊富であつた。

東魚 何か入用品、江戸で手に入る品にしるが、京大阪出来の品が多い。云はば京大阪は江戸の抽斗みたやうなものだとの洒落氣分であらう。

塵山 江戸時代には、京大阪で製作した物品が珍重されたので、物貨を注意して取寄せるのは、如何にも抽斗のやうなものである。

(24) 三十日にふつと出来る人魂

東魚 三十日の金に詰つて死ぬものもある。人魂もふつと出来ると思ふわけ。(名著全集柳雨本「人魂」とあり誤ならん)

塵山 是れは人魂の誤りかも知れぬ。三十日には債鬼といふ奴も来る。

省二 私の原句の書き方が相濟まぬわけであつた。原本を見ると「人魂」と讀める。然し「人魂」の誤字であらうと考へた。東魚さんの解釋通りに。されど人魂と云ふ言葉もあつて、鬼のやうな、むごい心或は行ひをする人をいふ。「鬼」か「魂」かは後日迄預つて類推したい。

(25) 前帯も言ハ、現の道具也

省二 夢が浮世か浮世が夢か。と

まれ前帯(傾城)をするのも、現の世に處する道具である。

東魚 これは後家の前帯の方ではないか。

塵山 傾城と後家、いづれとも決し難い。

(26) 赤坂て馬も度く抱つかれ

省二 東海道筋、御油赤坂、馬も度々飯盛に抱きつかれた事であらう。

東魚 馬でくる旅人も抱きつき引とめられるのを、馬も抱きつかれと興じて云つたのであらう。

塵山 馬を直接に抱くのではなくて、鞍上の人を抱くのである。

省二 結局は旅人に抱きつくのであるが、其前に馬を引きとめたのを詠むだのかと思つた。馬に馴染もあらう可々。

(27) あほうに成て止る人蔘

東魚 人蔘も餘り飲みすぎると、のぼせて頭が悪く馬鹿のやうになる。呆けたやうになつたので、人蔘を飲み止めると云ふのだ。

塵山 人蔘を服んで首を括ると云ふ、俗諺のやうなものである。

省二 高價な人蔘をのんで阿房になるほど、阿房らしい事はあるまい。

(28) 陀羅尼の咽を側て痒かる

省二 陀羅尼助を服む側に居る者が、さぞ苦からうと同情するのか、それ共、陀羅尼を誦する時の聲を聞きつつ、咽が痒ゆく、こそばゆく感ずるのか。

東魚 陀羅尼を誦する、だみ聲の方だと思ふ。薬を單に陀羅尼とは云ふまい陀羅尼助或はだらすけと云ふ。

塵山 賛成。

省二 陀羅尼は其用音聲にありといふ。

(29) 湯花か濟て凄い明神

東魚 湯花は湯立で、神前で巫女が笹湯を行ひ、段々神懸りになつて神託をのべる。明神のあらたかさが凄い計りに感ぜられると云ふ場合であらう。

塵山 自分も幼年時代に、屢々これを目睹したが、如何にも物凄いやうに思はれた。

省二 私とは幼時一度だけ見た。

(30) 仲人て来る日ハ指ぬ草履取

省二 例の腰のものを指さぬ。今日は仲人役だ。

東魚 草履取が仲人をするのだから、所謂引越し女房的な結婚で、仲人も日頃の出立ちのガタクリ丸をきめた姿はやめて、羽織位引つかけて来るのである。

塵山 草履取の腰に差すのは、木刀であるから、結婚の式には差して行かれぬ。

(31) 面白くて蛇のあてこすり

東魚 宴が面白くなつてきた頃に蛇の料理が出て、片思ひなどと禁句を云ふ奴があつて、一寸座が白らけた場合であらうか。

塵山 酒の上のわるい奴の所爲である。

省二 前句がないと面白くてこの場合が、正確に判明せぬ。がお説の如しと思ふ。

(32) 田樂のちりほりりと三下り

省二 田樂の季節となり、茶屋も出る客も出る。遊樂気分をかもし賑やかになりかける。「三下り」は浮き／＼する気分。いつそ殺せの三下りなどともある。

東魚 そこ此處に田樂やく茶屋もみえそめて、三下りと云ふ賑かな調子の季節になつて来た。

塵山 隅田堤か御殿山の風景らしい。

(33) 新し蚊屋の隅の正直

東魚 新ししい蚊帳は、それらしく隅々がピンと張つて、一見新しい感かされるのを、「正直」と云つたの

であらう。

塵山 昔の俳人等は、此様な洒落を云つて喜んだものである。

省二 「正直」の用語面白し。新しい蚊帳に寝る気分はよいものだ。それも「正直」と形容し得られむか。

(34) 九十九夜律儀に通い往生し

省二 深草の里の少將。謡「通小町」。『惚れ帳を九十九夜目で消して置き』

東魚 律儀に、諧謔味を覺える。

(35) 唇なめて一渡しまつ

東魚 急いで来てみたが、渡舟はもう出てしまつた後であつた。「唇なめて」は、急いで来て渴する趣か。

塵山 渡頭の出茶屋で、一休みといふ態である。

省二 一寸遅れた事を苦笑する態度がみゆる。

(36) 膝に寝られて膳に筋違ふ

省二 とう／＼子供が眠つてしまつたので、膳に對し坐り方を、一寸斜にする。

東魚 子供を膝の上にかゝえた姿がよく出てゐる。情味がある。

(37) 蛤の松葉くハへて煙りけり

省二 旅なれぬうちは桑名で頬をふき。桑名名物焼蛤。松葉や松かさで焼く。

東魚 畫に描きさうな趣。ちと作爲的ではあるが。

塵山 蛤が實に松葉を加へるのではなく、斯く見ゆるのである。

大阪名物 松前 本舗

松前屋

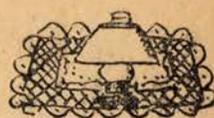
本舗 本館

支店 朝日ビル

支店 専門大店

支店 朝日ビル

支店 朝日ビル



川柳 題解と句例

— 路郎 選 —

(26) 衣料切符

★衣料切符制は戦時下の國民の衣料生活を確保するために昭和十七年二月一日から實施された。

★切符制の適用をうけない衣料品は帽子、蚊帳、製綿、袋物、紺類等のほかに、カーテン、敷物のやうな家具品、その他工場、鑛山、農山漁村の労働者に特配される作業衣、軍手及び理容業者、旅館、料理店等の業務用の手拭、敷布、蒲團等である。しかし古着類は切符が要る。

★衣料切符は甲種、乙種の二種で甲には總點數八〇點、乙には總點數一〇〇點の小切符がついてゐる。その外に何れも有効期間の書いてない小切符が二〇點宛と、制限小切符とがついてゐる。乙は市制施行地と六大都市の隣接町村で商工大臣の指定した地域に住んでゐる人に、甲はその他の地域に住んでゐる人に、一年に一枚交付することになつてゐる。國民は與へられた切符の範囲内で一ヶ年間に必要の衣料品を買うのである。

★有効期間の書いてない二〇點の



母の無い子供が巻けるゆでんあ 大西歩

福井 哲

昔の川柳に
現はれた

河童

前田 五健

聞いた事かいた事なしかつ
の尻 (古川柳)

どうも、あまり感心した現代向の川柳でないが、大體河童は居る否な有るものか無いものかと、なると、此の河童の句が面白く感じて来るから妙である。よく盛夏頃の新聞を見ると河童群の水泳隊とか

河童連の歡ぶ海水浴開きとか河童の字が、のべつに使用されて、河童とは、そもそも何かと子供に聞かれる、さあ一寸困る事に成る、そこで言海やら漢和字典を、ひろげて調べると、立派に書いてある。河童とは、四歳の兒童位で、水陸兩棲にして、面は脊

は手足とは事明細に記し九州方面に多しと迄、書いてあるから居るのかも知れず、又、「と云へども見たる者なし」ともあるから、河童の存在は臆腫となつてくる。然し物の本に享和辛酉六月初日、常陸の國水戸浦の漁夫に捕へられた一尻こき河童があるから、文献に無いとも云へず、又、日本刀傳説、本堂平四郎氏著によれば「有馬、包國」と河童の話がある。大略は、日向國、縣の城主有馬左衛門之佐直純の臣日下部八左衛門と云ふ士が寛永の天草役の戦陣に参加し大いに武功を現はして居た或日の大休止に附近の寺へ出掛け

た。此の寺にはスバラシク廣い蓮池があり、勿論よく茂つて蓮の葉は小山の如く盛上り、風でもあると物凄く揺れ、風が無くて、何か壓迫をされる様な一面の蓮氣に妖嬈を漂はして居る、日下部は、ブラ／＼と此の池の堤を歩いて居ると、フト三四間隔でた堤の水きわに、異様な者が寝て居る。これが河童である。忍び足で、寄り、抜き打ち一閃：水音水煙、蓮のジャングルが、大揺れに揺れて……つま

り一刀斬りつけたが逃がした譯である……斯くて、戦より歸つた日下部は江戸に……時は寛永十五年五月の夕暮れ、突然、日下部を訪ねて來たのが河童であつた一あの時、斬られたが残念でならん、一つ試合を致したい尋常に勝負せよ」と云ふので日下部は「ヨシ生意氣だ、やつて、やる来い」と河童と試合を開始した日下部は愛刀、河童は西遊記の沙悟淨に似た棒で、兩者へトヘトに成る迄、戦つたが、結末が、つかない、夜明になると一何づれ改めて勝負する今日はこれで歸る」と河童は歸つて終つた。日下部は勿論いつでも來いと返事をしたが不思議に此の試合は家人には日下部のみ見えて、對手は見へぬ、つまり日下部の必死の斬込み、體察し等が獨り戦ひに見えて、對手は見えぬ……こゝで一、寸、冒頭の句を思ひ出して下さい……斯くて再戦を約したが、その歳も、その翌年も河童は試合に來ない。寛永十七年の肌寒い風吹く九月に、待つて居た河童は再來した。戦ひは開かれた、然し結果は以前同様で無勝負に終つた一今度は近い内に來る一河童は信用ならん、眞

小切符は商工大臣が有効期間を指定するまで使へない。

★衣料切符は商工大臣が発行して市區町村長から町會、部落會、隣組などの隣保團體を経て全國民に交付され、切符の表紙には住所、氏名性別、年齢、世帯主及びその關係が記入されてある。

★甲に添附されてある制限小切符には晒一丈、ネルー・五ヤール、手拭またはタオル二枚、靴下又は足袋四足のほかに、い號乃至は號の切符がついてゐる。乙は甲よりも靴下又は足袋が二足分だけ餘分についてゐる。

★次ぎに掲げた人々には右の標準で市町村長が具體的に事情を斟酌して特別に切符を交付する。

- (一) 婚約の整つた女子 五枚以内
- (二) 妊娠五ヶ月以後の婦人 一枚以内、(三) 火災水害等の罹災者 五枚以内、(四) 盜難に罹つた人 一枚以内、(五) その他特別の事情ある者 具體的の事情による。

なほ臨時緊急に衣料品を必要とする場合は所轄の警察署長が證明書を發給して呉れる。この證明書があれば衣料切符がなくても買へる。

★衣料切符を商店に持参し、必要だけの小切符を切り取つて貰ふ。自分で勝手に切取れば無効になる。衣料切符は内地の衣料品を賣る店であらば何處でも通用するし、切符を所

實近い内に來るか「キツト來る一二、三日内に來る」さ

らば、さらば、と云ふ工合だつたと想像されるが、此の話が誰れ云ふとなく、廣がつて有馬直純の耳にも傳はつた。

これは面白い是非見物したいと、連絡係を置いて、待つて居ると、約を違へず河童が來た、日下部は河童に、今日は

股様も見物だが、差支へないかと念を押すと、應來と云ふので、試合は夕間暮から庭前で開始された。此の時、有馬

直純は日下部に愛刀を貸し與へ、これで斬れと渡したのが駿州住包國の銘、慶長十二年

八月銘、二尺三寸八分の業物である「ヤツ」……「エ

イー」……「まあ、この形容を竹影階を掃つて塵動かす月輪沼を穿つて水に痕無しと云ふ、ところで御想像を願

ひたい、「アツ……」日下部は逃げ出した河童を追つた。塀にヒラリと飛び上つた河童は「……」と云つて、消え失せる、この「……」を殿様へ

こゝでも、冒頭の句を一寸思ひ出して戴きたい。まあ一つ

の話は、松山市正安寺の事で本年九十一歳尙元氣で繪筆をとる鳴雲翁等の先輩、手島石

泉翁の話……「さあ、金は用立てるが、何か抵當品は、あるかい」へ、へ、あります

とも珍らしいものを持つて参りました「……」ほ、う何んじやこれは「……」これは河童の干物

です……和尙さん、値打がありますじやろ「……」こんな問答の末、河童の干物は正安寺の和

尙さんへ納まつた、……ところが、金子を返さない、河童の干物を物識に見て貰うと、

張りぼての、得體の知れないしやうもない物だに、和尙さん齒がみして、殘念がつたが

そこは表立て、は物笑ひと、考へたのが、毎年の夏の縁日に「河童の干物御開帳である」參詣人を、あて込んだのと、借り逃げの奴へ、面あて

伯は尺餘の白髯を、しごいてフワ／＼と笑つた。こゝでも冒頭の川柳を一つ考へて下さ

い。まあ一つ最近の話……「また釣針を、やられた」こゝはこう、掛る所でなかつたの

じやが、どう云ふものだらふか「……」さあ、何んと云つても昔は河童が居たと云ふ所じや

から何か、こう、エライものでも居て、ハリを、とるのじやろ「……」鮎釣、鯉釣連中が松山

を一寸離れた石手川の上流岩堰での愚痴である。誰れも彼れも、ハリをやられる、近頃

のハリであるからあまり安心

いものでない、特に鮎釣のハリは各自に秘傳があつて、金をかけて居る。それを毎日、こう、とられては、愚痴らざるを得ない「魚は多いのだが

ハリが惜しい、何がハリを、とるのじやろの釣仲間の問題となつた。或日或時、河童か

と思や人間かと河童と、河童そのまゝの様な悪童二三人が岩蔭で、ゴソ／＼やつて居た

が、やがて、針金を手繰りかけた、野茨を手毬型にして、所々に布設水雷の如く仕掛け

てあり、「ヤツ、今日は五本あるぞ」……

な事をやつてのける處に、人情の妙がある。

大阪のさる郊外電車沿線に鶴の町と云ふ住宅地があつてこゝに龜丸さんと云ふ至つて御圓滿な家庭があり、其息子さんも誠に立派な青年紳士である。

隨想 かつぎ屋

小山 文三

持する者に販賣を拒むことは出来な
いことになつてゐる。

★衣料切符は他人に譲渡したり、
他人から譲りうけたり出来ない。

★同一世帯の家族の切符でなら自
分のものが買へることになつてゐ
る。家族の一員でも女中などの切符
は流用出来ない。他人に頼まれその
人の切符で、その人の物を買ふこと
は出来る。

★衣料切符は紛失しても、その年
は再交付しない。次回の切符は古い
切符と引換へに渡されるから使用済
になつても保管しなければならぬ。

★衣料品の點數は洋服で云へば背
廣、モニング、タキシード、燕尾
服又はフロックコートの三ツ揃一組
が何れも五〇點、同上衣だけなら一
着二五點、同チヨッキ一着二〇點、
同ズボン一着一五點といふ風に一々
規定されてゐるが、詳しくは商工省
發行の衣料點數表について知られた
い。

十八九世の點數までも着る
路郎

切符制もつたないが着せて焼き
生々庵

一點のカラーがかくもよこれたり
塞草

衣料切符任友さんと同じ點
ライト

泉様も女中も百點氣持よし
平

切符制その身軽さが親しまれ
源三

衣料切符ハンカチ買うただけで遊
寄

き
寄史

郎さん、嗚呼美しい哉、縁起
の良い話よな、とてさる見知
らぬ大阪の人が訪ねて来て、
自分の息子某の結婚式に列席
して呉れと頼まれたといふ
譚がある。

招待された龜丸さんは御祝
儀を携へて此宴に列し、大變
な御馳走になつた其上謝儀の
一封まで貰つて歸つて来たど
の嘘の様な話を聞いた事があ
る。

これなどは鶴、龜、祿の縁
起のよい名にあやからんとす
る罪のないかつぎ屋であら
う。

さる小都市の呉服屋さんに
四千九百八十九番と云ふ特設
電話が當つた事がある。此呉
服屋さんは心平かならず、
四苦八苦なんて凡そ縁起が悪
いと云うので、二三年後さる
豆腐屋さんに譲つてしまつた
が、之れを譲り受けた豆腐屋
さんは、良く焼くと振假名し
て、焼豆腐の廣告宣傳に役立
たしめ、轉禍來福の實を擧げ
たと云ふ事である。

電話番號の戒七二九番は戒
七福と呼ぶので、かつぎ屋の
多い大阪では好景氣時代には
此電話一本に貳萬圓まで値が
ついたと言ふ話である。

今でも宿屋の部屋の番號や

隣保の番號に、往々四番や、
四十二番を省いてゐるのがあ
る。

人間と云ふものはいつの世
でも多少は縁起をかつぐもの
と思はれる。

さる田舎の一本筋の町で、
道路一つを隔てゝ舊家が向ひ
合つて建つてゐた。其西側の
家の屋根には大きな鬼瓦が相
對する東側の舊家の屋根を睥
睨してゐた。

之れを氣にした東側の舊家
の主人はいつの間にか大きな
鐘櫃さんを瓦屋に造らせて屋
根にとりつけて、向側の鬼瓦
に對抗せしめてゐるのを見た
事がある。

之れは鬼よりも鐘櫃さんの
方が強いと云ふ觀念から來た
一種のかつぎ屋の自己満足に
過ぎないが、若し更に向側の
鬼瓦の主人が、これではなら
じと閻魔大王にでも取り替へ
たら鐘櫃さんはどうなる事だ
あらうか、何れにしても慥に
憤飯ものである。

さるビルヂングの二階に事
務所を持つ株屋さんが、其事
務所天井近くの隅にお稻荷
さんを祀つた事がある。處が
考へて見ると、三階、四階の
會社や、事務所の人達ちが、
此二階のお稻荷さんの頭の上

を知らず／＼に土足で踏む事
になるから甚だ勿體ない事に
なると云ふ事に氣がついた。
それから各階事務所のめいめ
いが申し合せて、各別の事務
所内には神様を祭らないで、
八階屋上の露臺に祠を設けて
これに皆合祀する事にきめて
しまつた例がある。

こゝで思ひ出すのは、京都
あたりでよく見掛ける事であ
るが、階下の天井裏に、雲と
云ふ字を書いた紙を貼りつけ
て其下に神棚を設け、之れに
神様を御祀りして居る事であ
る。

こうすると、たとへ二階か
ら神棚の上を踏む事があつて
も、神様の上は雲だから勿體
なくないと云ふ氣持ちになる
らしい。これも自己満足の罪
のない話である。

さる會社の創立委員長が大

のかつぎ屋で、其會社の商號
を、巷の易者に頼んでとんで
もない名を附けて貰つて、之
を創立總會に諮つた處、皆が
大笑ひで黙殺してしまつた事
がある。こんな人達ちが若し
社長にでも成る事があれば、
定めて社長と常務、常務と支
配人の相性や、年廻りなどに
重點が置かれて中々人選がむ
つかしい事になるだらうと獨
り苦笑を禁じ得なかつた事が
ある。

新會員を募る

松坂俱樂部 川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知り
たい人▼趣味として川柳を創作した
人▼從來作つてはるが、よい思
考者がないので一方向進歩しないと思
はれる人々▼松坂屋(日本橋筋
三)の七階にある松坂俱樂部の誕生
路郎川柳講座(入會された)、講座
は月二回、第一、第三日曜日午後一
時から開講(作句・添削批評講義
等)會費一ヶ月一回。入會希望者は
七階の俱樂部受付へ申込み候す。
(川柳講座幹事)

Sata Special Klinik

呼吸器病科

佐多彦彦 加藤謙一

螺長四郎

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂成大



川柳

史界世

(XV)

蓬孤田戸

(二〇) 新航路新大陸發見史

總說

太平洋の日本、その昔太平洋に名さへつけてゐなかつた日本人。七つの海を我もの顔にふるまつてゐたユニオン・ジャツクに代つて今、我が旭日撒光の軍艦旗が世界の洋を日本の海とせんとする。大西印度、太平洋發見の歴史にいさゝか遅筆を重ねるのも無駄ではなからう。

霧うつす海をながめる海の民

前記

古い日本、ジパングのこと
にふれるマルコ・ポーロの旅

行記東方見聞録、何の爲めの大騒動かわからなかつた十字軍の反面効果、東と西の直接交通―中間排除で儲けたし、道遠しのジレンマ、それに磁石とトルコ人の邪魔立て、こゝろいつたものが重り合ひ、その上ポルトガルの航海王ヘンリーと云ふ様なバトロロンも現れてこの大事業は軌路にのる。

十字軍の敗けた記録が役に立ち

旅日記儲けは儲け道は道
吉凶の隅にトルコとジパング

金儲け地圖の稽古に餘念なし
生き還り航海王に召し出され

大西洋

玉子を逆立ちさせて友人を

煙にまいたコロンブス、一枚の地圖を手に入れるとレオナルド・ダウインチや伊太利フローレンスの天文學者トスカネリの地球球型説―ヨーロッパからヨーロッパへを疑はぬ。全歐の腰拔王候共を尻目にかけてスペインのイサベラ女王の小遣錢から探險費をせびりとる。精神―到處期の目的を貫徹。卷き添へを喰つて太平洋民族の一つであるインカ帝國が滅されたのは痛ましい。

地球は圓いとかく俺はこう
信す

眞夜中に又燈をつけて地圖を見る

本當の度膽女王はためされる
棄てた氣で女王は船と金を出し

椰子の實を見つて暗殺やめにする

貿易風玉座の前で描き入れる
鐵砲のわからぬうちに滅され
落ちこぼれ拾つて成金どもが
出來

印度洋

ヘンリー航海王の時代からの繼續事業。アフリカ南端にいたるまでの苦心、ヴァスコ・ダ・ガマと土人娘の戀。アメリカ發見に比べると地味だが一足さきに目的のジパングにも到着してゐる。アラビア語の國書が案外印度王の氣に入つて回教徒を制壓したり、ゴア市爭奪の血の記録など。臺望峰まだみえてゐる荒れてゐる

ヴァスコ・ダ・ガマ慕へは夕陽又赤し

地圖描いて一身代をつくり上げ
ゴア市史は又そろはんに血が流れ

太平洋

アメリカの探究は一五一三年西へ歩いたヴァスコ・バルボアの南の海(太平洋)發見となり、一五一九年のマゼランの出發となる。南米の先端今日でも一萬噸の巨艦が巻きこまれてしまひそうなる三角波彼の名をとつてマゼラン海峡と云ふ。その後洋上遠く食糧には窮したもの、案外平穩な百餘日の航海、それが太平洋の名の由来。英米の敗退により名實ともに太平洋となる日も近い。マゼランはフィリピンで土人の兇手に倒れ、その部下だけが五隻が一隻になつて三年振に歸國しはじめた

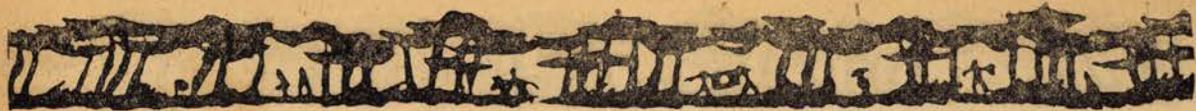
ヨロツパからヨロツパへ
を実現した。

この海に向ふにジパングあるらしい

マゼランの意志(モチ)一つを土産にし

どちらから歸つて来たかと先づ問はれ

後記



朗になれと一本付けてやり
鮮満支一如は掃除したい事
八幡船へ恥する心になぜならぬ
米持つて白濱の町歩かさされ
神様が御存知だけの戀でした
代替りチビタ硯が残される
子役もう戀といふ字を知つてゐる
傷兵慰問花は我家で出来た花
待居居いゝえ二人とどほたる
ワンピースで出るは二區乗る電車
ワンピース乳房が大きいなと思ひ
防空具待機のまゝのありがたさ
嫁ご荷におむつも母は入れたい氣
休閑地裸になつた元氣な子
落ちぶれてその風采もコンマ以下
婦唱夫和氣取でバスの長閑なり
看板屋見てると一服してしまひ
床柱背負うて食用蛙喰ひ
拔路次に未生流あり杵屋あり
わたりづなたる渡しへ鷺の飛び
伯爵の靴は光つてつゝし散る
静脈をみせたスカートの短かさよ
勤續二十年眼薬をさしてゐる
野次りなどこは桃割よけてゆき
仲人へ南方論をふつかける
コーヒを飲みにゆく帯しめてゐる
精神病院大きな鍵で開けて呉れ
ハイヒール微用令を御存じか
本屋で待ち合せてる頁くる
ユダヤもう流れる先を考へる
僕も又歡呼の聲に立つ身なり

社説まで読んで勝氣な女事務
小説にこうした見榮もある女
此頃は少女の夢も空を飛ぶ
今年の春は何時の間にすんだやら
うまいので缺勤届も書かされる
白衣みな電車の見える窓に寄り
休閑地前のたんぼの水貰ひ
三味線を弾いてお婆さんと知れ
昔はと老眼鏡をとり出して
手遅き知つてもほかの醫者を呼び
芽も出ない中に「あげましよ」「貰ひましよ」
大陸の様な心に何故なれぬ
散步する向うからもやせた人が
讚美歌がきこえてきそうな雨の日
全機無事基地ドラム鐘湯あふれ
級方この子の父は華と散る
氣構へは妻もモンベを放さずぬ
畫が好きで上手で吃で内氣な子
横綱の貫録負けても微笑んだ
バンザイバンザイ鵬鷄も聲をはり上げる
榮轉は狙つた椅子とおつしやらす
子等騒ぐおたまじやくしに手が生えた
都會の手おたまじやくしがすくへない
石鹼をどうぞと前と後から
赤ん坊の薄い〜耳に西日にする
リンク制などどまま事よく喋り
袖カパー屋上までの晝休み
病室で何處か鬨を焼くにはひ

上陸 (一六)(二一)
常識 (三〇)(三二)
持參 (三〇)(三三)
弱點 (三三)(三三)
結婚者 (二一〇)(二〇四)(三六)
心人 (四一八)(二一〇)
戀人 (一四)(一八)(一五)(一三)
戀笛 (八)(一七)
口屈 (四一三)(一八〇)(二〇)
窮屈 (八)(一四)
買物 (九)(一三)
考る (一〇)(一三)
看病 (一〇)(一三)
化粧 (二)(九)
小男 (三)(一五)(一七)(一七)
掛取 (一)(九)(一六)(一七)
金持 (四)(五)(五)
駈落 (一)(一七)(一五)(二四)
歡迎 (一)(二)(二)(二)(二)
工事 (一)(一)(一)(一)(一)
休暇 (一)(一)(一)(一)(一)
脚氣 (三)(三)(三)
首つり (三)(三)(三)
幹事 (六)(二)(二)
後悔 (六)(二)(二)
風邪 (六)(二)(二)
校正 (六)(二)(二)
苦勞 (六)(二)(二)
腰局 (六)(二)(二)
結局 (三)(三)(三)
怪絶 (三)(三)(三)
拒絶 (三)(三)(三)
口癖 (三)(三)(三)
乾盃 (一)(一)(一)



サンプル程の種子が届いた隣組 物干へ見よ東海のいゝ日和	吊橋にゆれて故郷の河たのし	妻と呼び夫と呼びて故郷を發つ ゴムの木の丸木橋だよ迂るなよ 橋さへ落せば逃げおほせると敵思ひ 借金も詫びも書いてる慰問文 罪なこと空瓶だけが列をなし 阪急の専屬にして裏長屋 電話ならすねても見たい人があり 借つた畑品澤山に植ゑてゐる この戦果寝て新聞は讀まれない お別れの言葉に死んで來ると云ふ 輕業のにつこり笑ふも藝のうち 出征の第三便はジャバに居る 出勤の靴を探せば子に履かれ 常會で言ふだけ言うて早く去に 市議選舉顔も知らない人に入れ 大掃除燕の巢には手を掛けず 純情へ心で詫びて嘘をつき 驚いた牛の背中に落下傘 残置燈ほのかについて喫茶店 配給の列で妊婦がいたはられ 休閑地もう餘技でない鉄のあと 一徹は義理や人情に目もくれず 安來節上手になつて歸省する ジャバへでもお伴しますと妻若し 花嫁の轎へ未來の夢がゆれ サラリーと別に髻だけ面白し 執達吏口だけ笑つて歸るなり 代書屋が眼鏡を拭きたい仕事 砂袋舞臺の隅の嵩で良し	大車田 濱本 邦夫	北支 宇敷 桃水	東京 岡部 士節	滿洲 西垣 錦風	大阪 石井軒史呂	津山 二宗 吟平	出雲 森山さわだ	大阪 富岡 巨人	大阪 橋口 松嵐	和歌山 北垣 神風	和歌山 左近 水京	大阪 米田 春童	石見 田中 弘樓	青島 葛蒲 榮城	大阪 野元 吐空	同 市川 周峰	同 同
--------------------------------	---------------	--	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------------	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	--------

病身を組が認めて長を辭し 山を堀る目にも山々夏となり 配給と別に酒ある課長さん 常會へ増産自慢の唾が飛び ノミと槌だんく佛の顔となり 何を云ふ日本語だけで澤山だ 風邪をひくぞといはれて風邪を 停電に初めて氣づく窓の月 日本語學ぶ土人の熱心さ 戦線の話子供は顔で聞く 豆靴の孫は天下の春を知る 信號を無視した背へ輕侮の眼 決議まだつかず時計のねちを巻き 女手に過ぎた小店が飯の種 嘗つて映畫で見たよな顔も手も 紙芝居時に學校の教師めき 碁敵の轉宅先を知らして來 書取に社説も讀んで聞かずなり 外聞もなく連敗へ軍使たつ 良い柄は柄だが切符置いて來た 嫁き後れ大陸ならと地圖を買ひ 運命の不思議を思ふ子の寝顔 獨身税妻もらふ事にきめました 止むを得ず節酒をしたが無病也 應援も候補も國民服で來る リヤカーを娘が引くは遺家族か 職業は樂し一日今日もすみ 年寄の手に自信ある新茶の芽 塵箱の何處にも紙幣は落ちておす エスカレーター動けばハイカーまでが乗り	東京 酒井 駒人	大阪 泉 いづみ	岡山 萱原 秋帆	神戸 市川 治男	兵庫縣 前田 勇風	大阪 若柳 青峰	兵庫縣 細田謙太郎	大阪 北原 儀一	大阪 中村 仙人	札幌 杉山怒來歩	大阪 齋藤 三丸	大阪 加藤ライト	安東 山崎 勇助	大阪 八田 鐘生	滿洲 喜多猪三郎	大阪 中西 彌生	大阪 奥村正太郎	大阪 永田六龍子	大阪 西岡 佳春	滿洲 安田梧一路	津山 栗井 蛙柳	大阪 谷崎 一昌	大阪 牛山 臥牛	大阪 佐野 牛歩	名古屋 鱒 秋暮	松江 岡崎 祥月	松江 横地 初恵	松江 大和 太郎	大阪 宮田 不二
---	-------------	-------------	-------------	-------------	--------------	-------------	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

顔かるた	寒稽古	門松	借地	片意地	買食ひ	記念日	空腹	苦笑	舊友	嚏	急用	客用	口答へ	狂人	苦勞人	海水浴	氣樂	寛ろぎ	彼女	食逃	感心	戀文	聲文	藥湯	髮湯	緊縮	空想			
五(57) 五(53)	五(53)	五(53)	五(53)	五(56)	五(59)	五(48)	五(53) 一七(16)	五(55)	五(47)	五(55) 五(50)	五(57) 二四(37)	五(54) 一八(18)	五(30) 五(45)	五(52) 五(54)	五(54)	五(56)	五(44)	五(48)	五(48)	五(54)	五(54)	五(42)	五(45)	一八(16)	一八(16)	一八(16)	二〇(34)	二〇(34)	二〇(34)	二〇(34)



初等川柳講座 (六)

麻生路郎

句の多讀と作句資料の多讀に就て

從來、初心者に對して、多讀せよ多作せよといふことは一つの箴言のやうに指導者の唇から漏れてゐますが、何を多讀せよ、何をどういふ風に多讀せよ、何をどの範圍まで多讀せよといふ風に指示解説した指導者はゐないやうであります。ただ漫然と多讀をすすめたのでは、病人の病状も聞かずに服薬をすすめてゐるのと等しく、どんな薬をどれだけ嘸めばいいのかわらないのと同様であつて全く手の下しやうがなからうと思ふのではありません。

多讀をすすめられた側でもどんなものを多讀すればいいのか、どういふ風に多讀すれば効果的であるのか、どの範圍まで多讀すればよいかといふ風な質問もせずに、ただ多讀せよといふ言葉をそのまま鶴呑みにして、兎に角川柳を澤山讀みさへすればいいのだと早合點をしてゐられるやうであります。しかし、この早合點は私に云はせれば寧ろ指導者の罪ではないかと思つたのであります。從來、指導の立場にあるものでも、多讀の意味を初心者と同じやうに、兎に角川柳を多く讀みさへすればいいのだと、すこぶる大雑把に考へてゐられたのではなからうかと思はれるのであります。次に私の多讀觀を少

しく述べて見やうと思ひます。

私は多讀といふことを、便宜上、「從來に詠まれた句の多讀」と、「一作句資料としての書籍の多讀」との二つに分けて居ります。

從來に詠まれた句と申しましても、初心者が作句の参考として讀む句は現代の句であることは云ふまでもありません。しかし、現代の句を多讀すればいいのだと云つて、手あたり次第に讀んだところで豫期した効果があがる譯のものではないのであります。

一概に現代の句と云ひましても、いい句もあれば、わるい句もあります。表現の巧い句もあれば、拙い句もあります。眞剣な作句態度の下に詠まれた句もあれば、戲作的態度で作句した句もあるののでありますから、句を多讀すると云つても、どんな句を多讀すればいいかと云ふことに先づ思ひをいたさねばならぬのであります。ではどんな句を多讀すればいいかといふ質問に答へるために、次に例句を示しませう。

辭職して何をか云はん植木(五葉)

こんな傷ぐらいと指はなかりけり(沐天)

擲くや元より金に嫁せし身の(菊花坊)

裝飾になるとは悲し苦心の著(文庫)

何もかも騰り淋しい血の数(喜田)

むかしむかし稼はは樂になりしとか(豆秋)

靴磨聴きたい靴前を行く(栗)

この邊へ洋服籠置けはよし(百雷)

どこに行く船が濼々西さし(曹天)

肺だからよるなと言へは涙ぐみ(兎堂)

以上は拙著「新川柳評釋」の中から拾つたのであります。味讀いたしますと、知らず識らずのうちに人生に觸れた句を詠むことが出来るやうになるものであります。右の句は何れも範とするに足る名句であります。柳誌の句を拾ひ讀む時にも、柳書や個人句集を繙く時にも、右に擧げたやうな人生を凝視した句を標準にして一句一句を批判的に讀むを濫讀したよりも遙に効果的

であります。又内容の批判に併せて表現技巧にも眼を向けて讀む必要があります。従つて私の多讀は千句、二千句の濫讀よりも名句百句の精讀、味讀をすすめたのであります。同じく讀むにいたしましても黙讀よりは音讀の方が、句の音律を自得する便宜が得られます。そして「川柳の音數と其のくぎり方」で述べたやうなくぎり方でもつて、音讀を繰返へしますと、句意がハツキリと味はへるし、作句する時にも、自づと調子の整つた句が作れるやうになります。その意味から音讀といふことは初心者の忘れてはならないことでもあります。初心者によく句が作れない作れないと云ひますが、右に述べたやうな研究が足りないからであります。ただ漫然と考へてゐる句が作れるやうになるものでは決してありません。名句を繰返へし音讀さへしてゐれば、いつのほどに言葉々と作句が出来るやうになるものであります。ヴァキオリニストが幾ら上手になつても毎日音階の練習を

怠らないやうに、音讀による名句の多讀をすれば句が作れないといふやうな悲鳴をあげることがないのであります。

撰まれた名句集の句の味讀をいたしますと自ら句の鑑賞眼が養はれてまゐります。多少とも句の鑑賞眼が出来れば柳誌の中から、自分の鑑識によつて名付佳吟を手帖に採録して多讀の範圍を擴げて行けばいいのであります。

川柳を作つたことのない私の友人が、私の發行してゐる雑誌を購讀して呉れてゐましたが、郊外からの通勤に、電車の中でその雑誌を讀むことにしてゐたさうであります。

はじめは文章だけ讀んでゐたのに、いつの間にか、句を拾ひ讀みするやうになり、もの一年も経ちますととうとう句を作り出しました。そして幾年かするうちにはいい作家になりました。この例から考へて見ましても、川柳が作りたければ先づ多く讀むに限ると思ひます。右の友人などは作らうなどとは思つてゐなかつたのであります。讀んでゐるうちに、おのづと作れ

るやうになつたのであります。

要するに、巷間に流布されてゐる川柳入門書やレベルの低い柳誌などの句によつて、川柳とはこんなものかと、自己流の句を濫作し續けたところで、到底いい句の出来る筈がないのであります。それよりも「新川柳評釋」に蒐録されてゐるやうな名句を味讀されたならば、作句上の血となり肉となつて、よい句を生む根底が出来上ります。

石井白面氏が編纂された一人の一代といふ小冊子があります。これなどは随分優れた句を蒐録されて居りますが、惜しいことに今は絶版となつて居りますから、手に入れ悪いでせう。「累卵の遊び」は少しく以前に出たものであります。句集では阪大川柳會で編纂された「大川端」がいいと思ひます。次に、「一作句資料」としての書籍の多讀一でありますが大體句の對象は森羅萬象何でもいのでありますから、文學書は申すに及ばず、歴史

地理、音楽、美術、醫學、法律、數學、心理學、論理學、政治、經濟、修辭學、宗教等々々あらゆる書籍を讀んでも作句上の助けとならないものはないのであります。それらの中のあるものは句の内容の向上に役立つし、あるものは辭句或は術語の應用が適確な表現となつて作句上微妙な働きと光彩を放つことが出来るのであります。しかし、特にどんな本を讀めば作句上裨益するとは斷定し難いのであります。

どんな本を讀んでも參考にならぬといふことはないのではありませんが、その作家の環境や趣味の如何によつて、必ずしも廣範圍に讀まねば句が作れぬといふ譯ではありませぬ。讀書の力によつて頭の養ひとせず、體驗によつてのみ作句してゐる好作家も稀ではないのであります。しかし、そうした作家の句境の範圍は狭いのであります。又語彙が貧弱であるといふこともまぬがれ難いのであります。一般的に云へば文學書・隨筆書、心理學ならびに新聞雜誌などを弘く讀むことは必要であら

うと思ひます。そうした讀書は何も川柳に限つたことではないとお考へになるかも知れませぬが、他の短詩型の短歌や俳句などに比して遙かに必要なのは短歌や俳句には閑取引や買溜や節電などの辭句や、キャンセルやキヤツシュなどの術語を知ることが必要はないでせうが、川柳にはそれが役立つのであります。

假りに文學書について申しましたも何を讀んだらいいかといふ例を擧げることが甚だ至難であります。漱石の小説や百間の隨筆などを讀むこともいいのではないかと思はれます。これはその人その人の趣味や性格の相違で一概には云へないのであります。科學書ばかりのぞいてゐる作家でも佳吟が作れないとは云へ

ないのであります。川柳が他の短詩型文學と異なる點はあらゆる方面の知識を吸収して作句上の血とし肉とする點でありませう。人間を作る書物と表現技巧の助けとなる書物とを併せて讀まねばならぬのであります。今までに述べましたことはすべて、初心者として、いかに多讀すればいいかといふことの一一般論であります。更に例へば古句の中から名句を拔萃し、其の妙味を翫味して自己の作句のたすけとすることも必要となりませぬし、又古句を翫味するためには徳川時代の社會制度や風俗習慣人情等を知悉する必要もあります。それは他日古川柳を講ずる時に譲ることといたします。

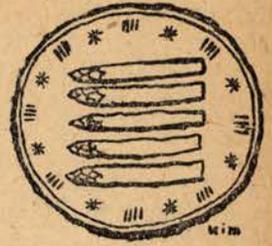
醫學博士 谷内與一郎

谷内小兒科病院

御入院に
御入院に
御入院に
御入院に

大阪市港區市岡元町一丁目(電車道)

電話 西四八七番



東京通信

福田山雨樓

胃腸を患つてから色々薬のことに氣をつけてあれでもない、これでもないと選擇しておりましたが、二、三試みても一向効き目が表はれませんでした。醫者に處方してもらつた薬も一薬として別段ないが、まあ胃散みたいなのをのむ位ですなあ、と云ひ乍ら下つた薬はあつて一、大した効果もなく、迷ふばかりであります。養生や醫療の書籍を見ると、結局良薬は少く、センブリやゲンノセウコなど薬草を氣永く飲み續けた方がよいと書いてあつたり、腹部マツサージや複式呼吸がよいとあつたり、自然良能の力によつて癒はるもので薬餌にたよつてはいかぬと云ふのもあります。以前艸藥兄から聞いた話では、薬が色々あるのは適薬のない證據で淋病など實に澤山の薬があるが、どれも効かないのである、との事でありました。胃腸の薬もこれと同様で、最近四、五日

間の新聞廣告を見ただけでも下記の如く澤山の胃腸薬がありますが、艸藥兄の話と思ひ合はすと、なるほどと肯かれらるものがあります。結局は適度に運動したり、食事を控へ目にして消化器の負擔を軽くしたり、腹部マツサージや複式呼吸などやつて便通をよくしたり、下腹部を布で締めたり、氣持を平かに持つて、よくせぬ事などが却つて養生の道にかなふのではないかと云ふ結論に到達し、やつと悟りを開いたやうな心持になりました。

ムサシヨソ。エルビオゲン。ネオネオギー。わかもと。モラ錠。新生アイフ。ピタレイ錠。ホシ、ミクローゼ。三式錠。イースト。調生ツキ。理研マグ。タカヂアスターゼ。エビオス。恵日錠。ペプリゼ。理研ピタス。ヘモニトリン。トモサン。カネボウ消化胃健錠。エンテロノンチエリオ。

近頃年をとつたせい朝早

く眼がさめます。大抵五時過ぎに起きます。が、出勤が早いので朝は精々新聞をザツと見るのと、ラヂオ体操をするのと、神佛に禮拜するので時間一ぱいで餘裕がありません。晩は大抵歸りが七時前後で、夕食を済まし入浴すると八時半夕刊を見てゐると九時十時にははや眠くなると云ふ寸法で、ほんとに讀書したり執筆したり、思索する暇が實に少いのであります。何とか都合して、さうした自分の時間を作りたと思ひますが、多年の習慣で容易に實行出来ませぬ。仲々更まりませぬ。ところが今日本省で禪の話を開きましてから心機一轉漸くあるさとりに入りかける事が出来ました。果してこれが實行に移せるかどうか、今から大きな事は申されませぬが、やつて見たいと思ふのであります。どんなさむりかと申しますと、わき目をふらぬと云ふさとりであります。一事實行と云ふさとりであります。今迄あまりに日常生活において、刺戟や興味や餘技に捉はれ過ぎておりました。あれやこれやと自ら求めて煩雜な環境に身を置いておりました。何でも知らうとしてゐまし

た。何でも見やうとしてゐました。何でも聞かうとしてゐました。そして結局何も知らず、何も見ておらず、何も聞いてゐないでした。心さへ心眼さへ開けておれば、いゝのだ。わき目もふらずやり通せばよいのだと云ふ事に氣付いたのでした。このことを今日先生に申上げることが甚だよろこびとするものであります。

○ 日曜日に一日かかつて梯子を作りました。幸ひ材料は古いものがあつてそれを間に合はせたわけですが、横のさんにする木は太い丸太を鋸で挽いて拵へなければなりません。この鋸と云ふ奴が仲々えらい勞力がいるもので一氣呵成にやらうなんて、とても駄目で、根氣よくやらぬと心臓が續きません。又兩の腕もだるくなつてたまりません。しまひには一寸挽いては休み、五分挽いては一服すると云つた風で、前後三、四時間要しました。煙草をすはぬのでぼんやり休むことも所在がない、そこで何かそこらにある本を讀み、休憩したことでした。曲りなりに梯子は出来上りました。少し弱々

しいので足元が危い感じはありますが、どうか屋根へも上れます。しかし小生の愉しみは梯子が出来たことの外にこれに要した勞働、運動が身體に非常によいことでした。夕飯はおいしいし、深い睡眠がとれたし、翌朝の便通がよかつたし、おまけに時間を惜しみ乍らの讀書も出来たし、正に一石三鳥でありました。われわれ人間は斯うした原始的な勞働が時には必要だなど思つた事でありました。尙特に思ひ出した事は、小生の祖父は農の傍木樵を業としたもので深い山に這入つて一日中大きな鋸を拜むやうな恰好で扱つてゐたものでした。鋸を持つと自分は祖父のあの赫顔を思ひ浮べ少年時の愛撫を感謝するものでした。

○ 北支へ出發してもう大分永いので便りがありさうなものと毎日のやうに待つてゐたから、やつとハガキが参りました。北支派遣軍××部隊福田榮三郎であります。初めて見る北支の風景は何もかも珍らしい、しかし元氣でやつてゐると云つて寄越しましたので安心してゐます。これから夏へかけては大陸の氣候で

随分えらいだらうと思ひます
が、北京の秋は何とも云はれぬ趣があると云ふことですから場合によつてはこの素晴らしき玉城の地を歩いてくるであります。内地にゐた時から歩くことにかけてはもう自信が出来たと申しておりますが、あちらでも相當猛烈な訓練を受けてゐること、思ひます。

一塚漁人、曾我廼家五郎丈

は先般喜劇脚本一千篇をものした記念に、喜劇でない社會劇の脚本に筆を染めると云ふ事が、たしか都新聞かに出てゐました。専門家(劇評)の間には丈が自作自演する事の可否について多少論議の餘地はあるやうですが、それは兎も角、今日までに千篇の脚本を創作されたとは驚くべき精力であり熱意であると思ひます。丈は本年六十五才とか云ふことです。假りに三十五才から劇作されたとすれば三十年間、一年には三十三篇一ヶ月約三篇の割合で作り續けた勘定になります。何と云ふ素晴らしい努力でありませう。晴らしい努力でありませう。しかも尙丈の筆力衰へず、益々筆硯を新にして新劇への執筆を念願してゐると聞いては

只々驚嘆の外はありません。

川柳家も四十を過ぎたものは、ほんの寥寥たる數で、五十の坂を越へたるものに至つては數へるほどしかありません。これは若いときにあまりに多作し過ぎて老來詩囊のひからびて来るせいかも知れませぬが、そんな事ではいけないのです。五郎丈の元氣にあやかつて、川柳家も大いに力作を續けねばならぬと感じた次第であります。

○

句集の持つ意義と云ふものを考へて見ました。個人句集の場合作者自身としては、わが子の成長を見るやうなもので大なる愉快、慰安、追憶、反省、希望など盡きせぬ感懐の湧くことは勿論で、この主觀的意義は申すまでもないのですが、私は茲では主として客觀的にこれを考へて見たいと思ふのであります。先づ第一に、句集は自己の川柳を社會(歌壇は勿論又壇外ジャーナリズム、學界等を含むところ)に示し且つ主張しその批判を乞ふものであり、その意味において最も勇敢な責任ある出版であると思ひます。句集を通じてその川柳の藝術的價値や詩の本質を正當に認識されるこ

とは、この上もない名譽であると共に、その風當りは極めて苛酷であることをも覺悟せねばならぬと思ひます。第二に句集は、川柳における一つの主張であると思ひます。この川柳を見よ、この川柳を味はつてくれろ、と十七字は叫んでゐるのであります。この意味から句を裏付ける主義主張の主要なる論説はこれを句集に併せ編むことは一層効果的ではないかと思ふのであります。第三には、句集は川柳盛觀のパロメーターであると思ひます。自信あり、野心(この言葉はサト面白くありません)がある句集が多く、高く出版されることによつて、川柳全體の聲價が、あがることになるのですから、句集を出すことは川柳人共同の責務であるとも申せます。

○

昨日晩の放送(子供の時間)を聞いてみますと、紫式部の話でありました。途中から聞いたので何人が放送してゐられるのかわかりませんでした。が、とてもお話がうまくてこんなうまい話をする方がゐたのかと改めて感服せずにはおられませんでした。放送が終つて見ると、それは久留島武

彦先生でありました。流石にうまいものだと思ひ感心した事でありました。そして少國民への話に一生を捧げられし久留島先生のえらさを思ひ、更に思ひを巡らして、川柳のために一生を捧げられし路郎先生のえらさを感謝せずにはおられませんでした。斯う云ふ方々がゐられればこそ、何の道でも進歩發達が遂げられてゆくのだ。斯う云ふ方々のその道に殉ずる熾烈なる精神が傳へ傳はつて伸びるのだと深く覺つたのであります。恰度東郷元帥の不抜の精神が今日の海軍の傳統たる見敵必滅の魂を育て上げたやうに。

實は、小生、久留島先生と天野雄彦先生とを一寸錯覺的に間違へておりました。雄彦先生の二雄の會一には路郎先生も御關係せられてゐたと記憶しておりましたので、放送を聞いたあとで一層お懐かしく存じ上げた次第であります

が、これは武彦先生でありました。何れにしても巖谷小波先生亡きあとの子供に對する親しいおぢさんとして童話界の双壁、ほんとに有難く思つた事でありました。

○

大阪商大、河田學長、堺出身の與謝野晶子女史相次いで他界せられ、痛悼申上げる次第で御座います。御兩氏ともわが「川柳雜誌」とりては、無形のつながりのあられし方一つ先生及奥様から思ひ出の記事を御掲載下さいまして、御兩家へ御贈呈遊ばされては如何で御座いませう。

譯評 古川柳の味

殘部少數あります。希望の方は五錢切手二枚送られたし
(社内・アート宛)





評月 川柳一ト筋

艸樂・丹路・豆秋
孤篷・一笑

豆秋提出川柳塔
御詠歌の趣味はお通夜を
報らせあひ (石塵)

豆秋何々流御詠歌大會な
どで優勝旗を貰うて來たりす
る連中が、お通夜と聞いて待
つてましたと許り集つて來て
呉れたんでは、佛さんも全く
やり切れんと思つてゐられる
でせう。此の句は斯うした連
中へやんわりと一矢を報ひて
ゐる面白い句だと思ひます。
孤篷今のお話ではありま
すが、誰が歌つてゐるのか、
其の佛様と没交渉である所の
他人が夏の蚊遣火の煙の中で
又は月の冴えた秋の夜、それ
を聞いてゐる時には一種云ひ
得ない所の哀愁の情を覺え、

其の佛様だとか親戚の人達と
は全然別な感情で吾々人間の
内の一人が亡くなつたと云ふ
悲しみに打たれる經驗を持つ
てゐます。だから、必ずしも
御座形の御詠歌講も、まんざ
ら効果の無いものでなく社會
的な意義を持つてゐるやうに
思ひます。そこに立派な詩が
あります。
丹路此の句が物を云つて
るのは豆秋説だと思ひます
な。孤篷さんのは御詠歌に寄
せる孤篷さんの抱懐であつて
此の句の意味する所は僕は飽
くまで豆秋説だと思ひます。
然し僕は僕流に解釋して、豆
秋さんの一矢を報ひる。云
々は強過ぎると思ふ。寧ろ、

お通夜を報らせあふお婆さん
連中のほ、笑ましい風景を想
像するのである。

孤篷甚だ主観的な云ひ分
か知れませんが假りに私があ
すネ、お通夜を誘ひ合つて
此の情景を此の眼で見たとす
れば、ああ嬉しい今晚も又あ
の鐘の音とお通夜の聲が聴か
れて美しい清らかなロマンス
インズムに入れると思うと、
何んだか日の暮れるのが待た
れることだと思ひます。

丹路そんなら僕と一緒で
すがナ。
孤篷置ひますネ、あんな
の言はれるほ、笑ましい婆さ
ん連中と云ふのは客観的なも
のと御覽になつて、飽くまで
穿ちの句で満足なすつてゐる
のぢやないかと思ふのですが
私は穿ちの句と同時に情緒的
なものも汲み出したくて仕方
が無いのです。で、そこまで
行くのは私の主観であること
も一度お断りして置きます。

豆秋えらいコンガラガツ
テ來ましたが、まあ善男善女
の趣味交際として御詠歌は大
いに認めて可いと思ひます。
一笑提出川柳塔
仕返しを考へるだけ負け
て居た (一將)

一笑此の句をルーズヴェ
ルトに見せてやりたいと思ひ
ます。
孤篷豆秋さんが御提出な
さらうとしてゐる一步を一つ
持つてアメリカ王手と來一と
云ふ早馬清富さん(近作柳塔)
の句と、これとの關係を御説明
して頂いたら如何でせう。
豆秋そうですネ、一步を
一つ一の句と此の句とは英米
側の作戦がタヂタヂの體にな
つてゐる點、一脈通じてゐる
やうです。戦争吟を將棋の手
で表現した句が大變多いやう
であります。作戦の偉大なる
天才、山本提督も餘技として
將棋の名手であると聞きます
が、戦争も將棋も作戦が大切
であると云ふ共通點を持つて
ゐるので、川柳にする場合大
變作り易い代りに、すば抜け
た佳句も出來難いものではな
いかと思ふのであります。手
に歩を一つだけ持つてゐて、
王手なんかと仕返しをするル
ーズヴェルトも哀れなもので
す。

一笑然し此の句は單なる
個人感情と解しても面白いと
思ひます。よくある事で、一
寸した恥しめを受けた場合な
ど其の仕返しを一ト通り考へ
て見るものですが、結局、それ
丈自分が負けてゐたと云ふ事

に氣がついて來るものです。
艸樂此の句だけ見ると自
省の心が窺はれるやうだ、と
同時に自嘲にも聞こえると云
ふ意味合ひで或る力を持たせ
てゐる。
孤篷勿論お説の通り。仕
返しと云ふ事は相當手酷く負
けたので起る所の考へに違ひ
ない。時恰も、日對米英の情
況が全く之に一致した。少し
位ひ負けたんでは、頭の高い
ルーズヴェルトは仕返しなん
て苦臭い事を考へなかつたか
も知れないが、今日の情勢か
ら見ると彼の遺言は、せめて
仕返しでもしたい、としか受
けとれない。その意味で、私
は先刻の一步を一つ一の句と
共に詠史川柳の範疇に入れた
と思ふ。而も優れた詠史川
柳として、昭和十七年史の劈
頭を飾りたいと思ふ。
孤篷提出川柳塔
恐怖もて髮の變化を見守
りぬ (正柳)

一笑此の句をルーズヴェ
ルトに見せてやりたいと思ひ
ます。
孤篷豆秋さんが御提出な
さらうとしてゐる一步を一つ
持つてアメリカ王手と來一と
云ふ早馬清富さん(近作柳塔)
の句と、これとの關係を御説明
して頂いたら如何でせう。
豆秋そうですネ、一步を
一つ一の句と此の句とは英米
側の作戦がタヂタヂの體にな
つてゐる點、一脈通じてゐる
やうです。戦争吟を將棋の手
で表現した句が大變多いやう
であります。作戦の偉大なる
天才、山本提督も餘技として
將棋の名手であると聞きます
が、戦争も將棋も作戦が大切
であると云ふ共通點を持つて
ゐるので、川柳にする場合大
變作り易い代りに、すば抜け
た佳句も出來難いものではな
いかと思ふのであります。手
に歩を一つだけ持つてゐて、
王手なんかと仕返しをするル
ーズヴェルトも哀れなもので
す。
一笑然し此の句は單なる
個人感情と解しても面白いと
思ひます。よくある事で、一
寸した恥しめを受けた場合な
ど其の仕返しを一ト通り考へ
て見るものですが、結局、それ
丈自分が負けてゐたと云ふ事

に氣がついて來るものです。
艸樂此の句だけ見ると自
省の心が窺はれるやうだ、と
同時に自嘲にも聞こえると云
ふ意味合ひで或る力を持たせ
てゐる。
孤篷勿論お説の通り。仕
返しと云ふ事は相當手酷く負
けたので起る所の考へに違ひ
ない。時恰も、日對米英の情
況が全く之に一致した。少し
位ひ負けたんでは、頭の高い
ルーズヴェルトは仕返しなん
て苦臭い事を考へなかつたか
も知れないが、今日の情勢か
ら見ると彼の遺言は、せめて
仕返しでもしたい、としか受
けとれない。その意味で、私
は先刻の一步を一つ一の句と
共に詠史川柳の範疇に入れた
と思ふ。而も優れた詠史川
柳として、昭和十七年史の劈
頭を飾りたいと思ふ。
孤篷提出川柳塔
恐怖もて髮の變化を見守
りぬ (正柳)

つて居らないかも知れないが過去の結髪史を少し許り覗いた私としては、新しい面白いものが現れたやうな嬉しい気持ちで讀ませて頂く、と云ふ意味は女性と衣食住、殊に髪の問題などは無意識に時代の思潮を反映する。詳しくお話しする餘裕はないが、髪を見ておると不景氣來襲や戦争の豫感が判然と判るし、又、髪形から各國の國性と云ふものも讀みとる事が出来る。その意味で髪の変化を恐れる句主の境地が私流にはあるが能く判るやうで、此處に又一つの詠史川柳の醍醐味があるやうに思ふ。

艸樂 恐らく作者は所謂雀の巢、パーマ式の髪などを見て慨嘆したのでらう。然し時代の波に乗つて、作者の好まない風潮を追つてゆく髪形を恐れてゐるが、さて自分では怎うにもならない。諦め的心を以て見守つてゐるやうである。その氣分が汲みとれる。

豆 秋 女の髪も一つの藝術だと思ひますが、昔の丸髻のやうな大藝術品は近頃迎へ見られない。作者が恐怖を感じるのも無理はない。

艸樂提出 川柳塔

雜草の力を知つた休閑地 (綠葉)

艸樂 休閑地と言つただけでは休閑地農園を必ずしも考へる必要はないが、恐らく休閑地利用の句と受けとれる。こゝで私達は茄子一本作るのでも容易でない業を初めて知り、同時に農家への敬服の心情が窺はれるやうである。容易に見えて、なかなか野菜一つ満足に作れないけれども、それを害する雜草の力のほどと強いことを感じる、と云ふのは作者の句意の通りである。

丹路 兎に角、嘘の無い句作意の無い句、派手ではないが内に力を持つた句、と云ふ意味で好感が持たれる。此の句を迂つかり見失はないで取り上げた艸樂さんは流石だと思ふ。

孤蓬 力と云ふ文字が入つてゐる。それから雜草と休閑地と此の三つの要素を獨立して眺めた時には大して美しいものではない。大體此處に大先輩艸樂さん、丹路さん、豆秋さんを前に、こんな事申しあげては、おまじい、この頃生徒に川柳と俳句の差を問はれた時に何時も云ふ事は

俳句は詩語だから凡人が其れを組み合はせても、兎に角詩の恰好になる。川柳は言葉そのものには詩の無い場合が多い、それを作者の詩性が詩にしてふのだ。この意味に於て、此の雜草の句などは實に優れたものだ。俗語を使つてそう云ふ意味を表現したのもとして一隣組おつと産婆だ合點だ一と云ふ、佐伯鷄城さん(近作柳梅)の句から滲み出て來る詩性を推奨したい。

孤蓬 此の句に就ては既に云ひたい事を云つてしまつたので、後のところはよろしくお願ひ致します。

隣組おつと産婆だ合點だ (劉城)

孤蓬提出 近作柳梅

丹路 先刻、此の句に詩性があるやうに云はれたが、それは孤蓬さんの詩性に引き入れて云はれたので此の句自體には詩性は稀薄だと思ふ。寧ろ、騒々しい氣分と隣組の親和氣分の交錯を、單に描寫した句ではないか。

艸樂 と同時に、ある階級を物語つてゐる。けれども句としては時々試られる手法であり、ちよつと作意も覗いてゐるやうである。

孤蓬 私之眼が 詩性が決

して頼ツベタに附いてゐる譯ではありません——此の句を提出した意味は成可く詩語でないものを選んで詩になつてゐるやうなもの、而も先づ、低い鑑賞眼に對しても或る程度の理解を可能とする範圍で、先に述べた俳句と川柳の區別が判ればと云ふ老婆心からに過ぎない

ルビヒサア 社會式株酒麦本日大

滿洲へ行く日は女強くな (可紅)

艸樂 別に説明は要らない理窟も無い、作者の感じである。讀者も、作者の感じに同化されようである。

一笑 此れ、夫婦で行くんでせうか?

丹路 それ僕も考へてましてん。夫婦で行くものか、何かの事情で女だけが行くのか……

一笑 女だけが行くんでせうネ。

孤蓬 そうだんな、そうでないが此の句生きてけえしまへんが。

一笑 私ネ、先々月、此の四月に姫路までの車中でこんな人達に合つたんですが、一増産報國勤勞奉仕隊一と書いた大きな幟を持つてゐました。それで神戸邊りからボツボツ談し掛けて見たのですが其れは長野縣のお百姓さんで滿洲へ約六ヶ月の日程で行かれるのだと云ふことでした。勿論、娘さんも居ればお爺さんも居られるし、青年團のやうな服を着た人も居られました。殊にその時、私の胸を打つたのはモンベ姿の娘さん達でした。彼女等は嬉々として戯れ、或は唱ひ、まるで小學

のであつて、之も全く、私の新しい仕事から來た意識に由來するのだらう。

豆 秋 川柳の身上たる平言俗語で成功しとる句です。隣組も斯う云ふ咄嗟の場合、防空演習の訓練が早速、役に立つたと云ふものですナ。

艸樂提出 近作柳梅

生の修學旅行か何かのやうにしか見えませんでした。それは、南方で働いてをられる兵隊さんのことを思へば、と其の人達御自身は一寸した旅行位ひの氣持で居られたのでせうが、それにしても、一人位ひは情氣てゐるやうな人もありさうにと思ひ、車中を見廻しました。誰ひとり元氣で張り切つてない人はありませんでした。

卍樂此の句の場合の如きは、開拓民とか、獨りだとか夫婦だとか云つた風に想像しないで、常に心の弱い女だと思はれてゐたのが愈々滿洲へ行く日に、案外強いもののある事を感じた。其處を吾々も觀賞してゐるのだ。其處に詩があるのではなからうか。

丹路 必みじみとした句だなア。
孤蓬 もう既に云ひ盡くされたと思ひますが、兎に角、一度喋らずに濟まないのが私の悪い癖。弱い女の過去が何であつても可いが、其の弱さを強調するための何かしら逆境とか矛盾を想像して、初めて強さと云ふものが生きて来る。その強さが海外進出の急先鋒を承る或る特殊な、所謂からゆきさん達の女性、身も

心も犯し盡されて、なほ且つ君ヶ代を唱ひ、雲に聳ゆる高千穂の峰を知つてゐる。其處に日本の強さがあり、世界の指導者として恥しからぬ資格があり得る。

丹路提出 川柳塔

木枕へ針山程のはゝの鬚

丹路 此れ亦、説明しないで能く判る句。いゝ句だと思ふ。

卍樂 老練な作家の巧みな表現による佳い句ですネ。何となくほゝ笑ましくていゝですなア。

一笑 此の針山程の云ふのは如何にも母に對する哀れつばい同情があるやうで先月の月評にのぼつた「これ白髪母の頭だもう生えな一昌一の句なんか一脈通する所があります。

豆秋 つゝ、ましい母の寝姿を凝つと見てゐる作者も見えるやうです。

卍樂 針山程とは一寸云へん句ですぜ(同感の聲あり)

豆秋 一は、一と假名で書いてある文字の扱ひ方などもなかなか達人なものです。

卍樂 斯う云ふ句は、なかなか出でずすなア。親孝

行をお題目みたい云ふより此の句一句讀ませてやつた方が、どれだけ効果があるか判りませぬナ。

丹路 戦地の兵隊さんに見せたら、其の母を偲んで泣かされるやうな句だなア。兎に角、口先では云へぬ句。作者の人柄が期せずして滲み出てゐる。

豆秋 髪の変化に恐怖した正柳さんに此の鬚を見て貰つたならば、さぞ得心されることとせう。

丹路提出 川柳塔

牡丹散つては紙切の如し

丹路 佳い句だと云ふより問題になる句だと思ふ。先月の月評に上つた「花が散る夜櫻なればさびしからず」不水一と一脈通じてゐる。それに劣らず「紙切の如し」は表現に於て優れてゐる。兎に角強い性格が如何なく出てゐる。表現の美しさの壓巻は、眞ん中の「紙切の如し」で切つて、所謂、間を置いて一見返らず」と時間的の経過が判然と表出された所にあるんでせうネ。

丹路 どうです卍樂さん！斯う云ふ句のゆき方は一寸なかつたですネ。

卍樂 破調ですネそして二段に切れますネ。だから、リズムに拘泥する人は好まな

いでせう。それだけ引きしまらないとも云へませう。作者には、何か偶意的なものがあるのぢやないでせうか。

一笑 人間社會に於ても、實にこの句の通りである。一ト頃、隆盛を極めた何々家も、一旦没落すれば親戚からも出入の者などからも、見返へられなくなつて了う。

卍樂 家貧にして親知少しですか。

一笑 牡丹は百花の王として人々から眺められる物に出来てゐても、季節が過ぎて散つてへば、人は愚か蝶々からも返り見られない。

丹路 僕は此の句にそう云ふ偶意的なものを感じない。そう云ふ偶意を持つた句であれば、斯う云ふ調子に出ないと思ふ。先刻、卍樂さんが句の調子が引きしまつてゐないと云はれたが、僕は相當この調子は張つてゐると思ふ。それで此の句は此の句なりの姿で作者の強い姿を見てゐたら可いのだと思ふ。

孤蓬 燐寸の軸木が折れた

オムニオン

非特異性全免疫元

本剤は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(適應症) 各種肺炎、肋膜炎、傷寒、傷寒熱、中耳炎、蓋腸熱、其他各科、急性、慢性、炎、急性、傳染性、敗血症、並に化膿性膿痰に對し良效に著効を奏す。

(用法) 注射無痛、副作用無、用法簡單、奏效迅速、價格至廉。

(價) 二cc 瓶 200円
一cc 瓶 100円
三cc 瓶 300円
五cc 瓶 500円
十cc 瓶 1000円
發行元 株式會社 黒田藥品商會
大阪・東京

ら、どんな偉い人でも元通りひつ付ける事は出来ない。散つて了へば牡丹の美しさはもう無い。偶意も見たまゝの感じも茲に止揚して、其處に犯すべからざる眞理があり、それが私共の詩ごゝろを刺戟する。(幽王筆記)



隨想

投句前後

奥村丹路

私の句を私が云々するのはおかしけれど

時雨の日いづこともなく嫁にゆき

と言ふ句を自有浪さんがほめて下すつた。

實はあの句は、投句以前に棄てやうか知らと思つた句である。

「何處とも知れず、嫁入するやうな女があるかい」と言はれさうで、さう言はれ

たら一言もないお芝居じみた句になるから。

しかし嫁にゆくのが、向ひの娘さんであらうと、自分の娘であらうと、はたまた恋人であらうと、嫁にゆかれて、あとに残されたもの、心もち

は、どうしても、「いづくともなく」と思ひ切つた表現をとりたかつた。

だから「いづこともなく」はこの句のミソであり、ヤマでもある。その駒が、反つて

わざはひをする様なら——と推敲もせず棄て、しまはうと思つたのだ。

それと、この句が出来たに ついては、特定のモデルがあり、實感でもあつたのだが、

それ故に、ひとりよがりの句になつてはゐないか——とも心配した。けれど、この句の気分は一般にもきくし、分つても貰へると信じて、ひとりよがりに終らぬ様に、原句を改めた。「時雨の日」が、あらためた言葉である。——私

た。

にとつては、さう言ふ句であつたので、路郎先生に抜かれたときも、自有浪さんに案外ほめて頂いた折も、句のよしあしとはかくとして、句が分つて貰へたと言ふだけで、——正直に言つて嬉しかつた。

よく事故のある踏切の立看板に「電車に注意すべし」と書いてあつたところ——の字を「も」の字に書き直したいたづら者があつた。

でんしゃ

須崎 豆秋

「なんと守口から築港まで一時間餘り乗つて六錢だつせ今どき市電の電車賃位安いもんおまへんやろ」

「低い聲で言ひなはれ、車掌さんに聞かれたらあきまへんがな」

手を逃げた螢は星にまけぬ氣か

地蔵尊バスの埃りを肩に見せ

出征の兵を勞はる風呂を焚き

商賈は鹽でよろしい傷痕章

蔣曰く大和魂 強いある

鮎舟へ十一貫の我が姿

鮎舟へ橋から惚れた聲となり

忠孝の一軸に居間簡素也

途で遭ふ父は笑つて呉ぬなり

無下にしてならじ火叩置き替ゆる

角帽の櫻喫ひつけうそぶける

客が同情してドツと笑つた。照國のやうな腹をしたこの紳士もいつしよになつて笑つた。

満員電車でビール腹の紳士が降りやうと焦つてゐるが、なか／＼出られない、「横になつて出て下さい」と云ふ車掌の聲に「ソラ無理や」と乗

年寄りには昔の味と値とを云ひ繪本好きを偉い子供と親思ひ時折は墓石の向き變へたい糸

たくましく田植がすめば行く息子病床へ来る書留は賞與なり

辯護士にその意地づくをなだめられ顔役の立場國民服を着る

病室に野生の花がきつすぎる軒低き家に軍神生ひたちぬ假事務所それでも世界地圖を貼り

今治 長野 文庫

後 も 銃 戦 線 も

阪 田 騰 寫 版

大阪市此花區上福島北一

株式會社 阪 田 商 會

同舟近詠

松山 前田 五健

不笑不嗔觀音様はよいきれう

爆發に似た雲むくりむくり夏

やゝこしく膝で歩いて蠅叩き

その譯は知らず朗々詩を吟じ

子も御盾親も御盾の居合術

與謝野曼子女史を悼む

君逝けり城、石手寺とある名歌

金澤 安川 久留美

矢車の花が社長の好きな花

手逃げた螢は星にまけぬ氣か

地蔵尊バスの埃りを肩に見せ

出征の兵を勞はる風呂を焚き

商賈は鹽でよろしい傷痕章

蔣曰く大和魂 強いある

鮎舟へ十一貫の我が姿

鮎舟へ橋から惚れた聲となり

忠孝の一軸に居間簡素也

途で遭ふ父は笑つて呉ぬなり

無下にしてならじ火叩置き替ゆる

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

柳 秀

今治 長野 文庫



飛燕往來

★高尾しげを氏（東京より二前略）

先月仲間と頼まれて、和歌山と白濱の病院慰問に行きました。大阪は、驛と難波の地下室を歩いただけで素通り、いや早です。前號の私の紹介で病兵の中から、あとで句をかりて貰へれば、と云つてきた人がありました。わりに兵隊さんには心臓のくせに弱いところがある。最近私は表具師の柳人が、こちらの頼みをよく忘れるので、川柳をやる様に仕事も熱心によつてくれと云つたところ、川柳と仕事と二緒にされたので母親から、川柳を止めるか、その客を断るか、どつちかにしろと云はれ、客である私はいで御断りとされました。川柳もこゝまで來ると萬歳と云ひたいが、この柳人、また本堂に川柳のよさが判らぬので嘆かほしいと思ひます。人間の出來ない柳人の多いこの頃の柳界、句ばかりうまくてはいけない事を更に／＼痛切に感じました。六月十三日—路郎宛—

舌の有り、です。今山野には香りが高い鈴蘭と藤、關西人には珍らしいもの多々有です。次から次へと珍らしい花が咲く中に、蒲公英、蓮の如き内地と寸分違はぬものも有りです。すべての花は小さく、五分ノ一位の大きさも半分位の大きさのものが多いですが、型は皆同じ花です。地下一〇尺も凍結してしまふので蛙も見事あり、蛇も見かけます。型型は幾分違ひながら、生物の生存力の偉大さを沁々と考へさせられます。生物の長として、如何に北邊極寒の地と開拓團の進出も當然の事と存じます。谷間々々の開拓団には、今青々と野菜、豆莢が生長して有ります。荒野原の中を、何の慰安も無き其の中に、物思ひ易い青少年が自然を征服しつゝ有る姿を見る時、物慾を放れて、國家使命達成の尊さを感じさせられます。野菜は肥沃の地とて沖も大きく、よく出来るのです。私等も又、茄子や胡瓜やトマト、西瓜と空地を利用して植つてました。此頃の時侯ですと内地と何の變りもなく、迎も良ろしい。これもほんの暫くで、間もなく百度突破の夏になります。六月八日—豆林宛—

★村野東狂子氏（朝鮮より）人煙稀なこの山里に十年、訪ねる人もない、そんな山奥に川の流れる淀みに寄る魚、そんな偶然で集つた内地人が川柳人であるのも奇です。その集つたのが徳水林業子と嘉部造林子です。今後此の二人と小生と源太君の四名が軸々作句して路郎先生の平素の御薫陶に應へんと志してゐます。徳永君も嘉部君も共に昨年當地に出來た總督府營林署の造林所に來られた若い人で、官高農林時代校友會誌に投句した事があるとの話に、待つてましたと云ふ譯で本月から暇々に集る事に一決した次第。何分當地の環境所で、内地人と云へば官吏、それも大抵警察官の方々が二年位経ては、川柳と轉動と云ふ有様（中略）時々、川柳は行かぬらしい。この時、斯した人々が來られたと云ふ事はダレ氣味であつた小生や源太君にとつて、十二月八日のあの様な感激を齎して呉れました。折角やりかけた小林かづさ君も内地に行かれましたが其後、兵庫縣の郷里から投句してゐるので大いに奮勵して讀む様にさし度いと思つてゐます。小生の様な小鐵業者は果して今後どうなる所までと努力してゐます。小生も川柳を始め十五年前、甚だ不勉強で上達もしませんが大いに努力はしてゐます。源太君が幸ひ一緒です、同君は元大阪に於て御社の句會や當時の糸屋町支部に出席されたりした事があるので、同君の指導で句會の眞似でもし度いと考へてゐます。五月廿三日—路郎—



★福井晋氏（大阪より）（前略）今日、日光白雲の瀟々夏を夏に選びました。日光白雲の瀟々夏に選びましたのは前に私が日光へ行つた時、有冬過ぎる華嚴の瀟には餘りビツクリも感心も出來ず、それより御隣りの餘り知られて無い華嚴の御（への）様になつてゐる白雲の瀟の岸に激し岩を囀んで滔々と落下する勇壯な有様に茫然と見とれてしまひました。まるで皇軍が敵の陣地に喚聲をあげて雪崩込む豪壯さを思はされます。何と云ふ男性的な氣もちよい瀟ですよ。これから見るや女性的な華嚴の瀟は好きになれません。瀟は途中で腰を打つてはいけな、何十尺何百尺たなだけで尺尺で計つて優劣を定めただけでは費成出來ません。それが本月の表紙に白雲を選びました所以です。六月十七日—路郎宛—

★森田カズエ氏（奈良縣より）（前略）今朝、「川・雉」が困きましたので早速拜見させて戴きましたところ、貴方様の「逝いてなは和の民そ二十一」の句に、つと胸をつかれる思ひが致しました。軍人になる事を唯一の望みとして、若い人らしい希望を抱いてみた弟です。兄弟中、私と一番よく氣が合ひました。一番末ッ子に生れた故爲か、いつまでも子供らしい感じがして母によく甘えてゐました。詩吟が好きで、習ひに行つて來ると母や私に、批評をして呉れと云つては幾度も聲を張上げて吟じました。巧いへた時は、迎も氣をよくして教へてあげるから稱古をするやうにと云ひました。私に於て皆を笑はせるのでした。そんな時の弟の得意氣な顔が、今も胸に判然と残つて居ります。お棺の中へ歸るテキストをみんな入れてやりました。別の世界で、又盛んに吟じてゐるやうな氣がしてなりません。よく河原の堤へ出掛けて行つては、乃木將軍や楠正成を思つて吟つて居りました。それが少し隔れた所にある家まで聞こえて來るのでした。今でも夜になると、弟の聲が河原の方から聞こえて來るやうに思へます。病氣が酷く悪くなつて來た時、戦争に行つて死ぬ幸福な人があるのに、自分は斯のやうに病氣が死ぬなんて情けない、と云つて口惜しがつて居りました。最後まで頭腦がはつきりして居りましたため、一層あはれでなりません。亡くなる日の朝も、母や私に「永いこと、お世話になつたのに、恩返しもせず終つて、恥忍して……」と云つて泣くのでした。最後まで希望を捨てずにゐる母を嘆かせました。亡くなる四、五日前頃から顔つきがあどけなくなり、よくニコ／＼と笑ひました。「お母さんは矢張り一番よいなア」と云つて母の腕を握るのでした。又、私の手を握つて「姉さんは細いから肝に注意せんと病氣になる」等と泣き笑ひをさせるのでした。今も弟の手の温度が私の手にあります。私か和歌山に通動してゐた頃、朝晩驛まで送り迎へて呉れたのも弟でした。家の者が肩を凝らしても、直ぐ揉んでやらうと云ふのも弟でした。短い生涯であつただけに、誰にでもそれば／＼優しくしてゐました。昨日の日曜日には父と私と、三人で那知山へ詣り行きました。母は弟の寫真を胸にしてゆきました。紀勢西線を走る列車の窓から海岸の素晴らしい風景を、母は弟の寫真に見せてやるのでした。そんな母の姿を見ると堪らない氣が致します。（後略）五月十一日—アート宛—



募集句

一路集

占領 夕鐘選

カメ風呂の歌ものどかな占領地
 占領地オランダ色の濃いとこ
 子の戦占領した揉めてゐる
 占領の勝鬨馬も知つてゐる
 占領を知らず敵機は降りかゝり
 占領をしてから戦死擔架なり
 ウイスキーの瓶がちらかる占領地
 激戦の跡ありくくと占領地
 占領地華僑ヘラ〜世辭も云ひ
 墓標まだ木の香の匂ふ占領地
 占領地もう建設の鉄が下り
 占領をされてゆるんだ敵の顔
 占領に生きてた事を不思議がり
 占領地知らない花が咲いてゐた
 占領地星がきれいといふ便り
 占領地月へおけさの輪が組まれ
 敵陣地取れば女の靴があり
 占領地もう日本語で用は足り
 占領地石油が出る米が出る
 還らざる一機へ占領地の雲速し
 占領地母に教へる地圖へ立ち
 占領地部下の手柄を云つたげ
 占領地手眞似もまじる胡かさ
 占領へ悲憤の涙しきりなり
 兵の腫唯占領へ燃えてゐる
 占領地椰子の木の下湯があふれ
 占領へ勇士軍靴をまだ脱がず
 占領へ愛馬の汗を拭ふなり
 (佳) 占領地もう皇恩に浴さしめ

吟蘭坊 惡源太 子盛 國夫 抱逸 神風 水京 彌生 詩朗 翠光 翠芳 雅美 英實 叮紅 柳戀子 敏郎 清富 信治 紫花 紅之介 小城子 同 美奈子 同 照二 同 カズエ 同 春涉

硯 文庫選

(佳) 占領へしみん〜とみる世界地圖
 (佳) 無血占領街は埃があるばかり
 (佳) 軍票も兩掌で受ける占領地
 (佳) 血のじむ日の丸建てし占領地
 (人) 占領へア、生きて居た腕を撫で
 (地) 君も行け僕も行きたい占領地
 (天) 肉弾に歴史と地圖が造られる
 (軸) 英靈へしつかと告げた占領地

忠孝と書くに硯の水を替へ
 硯持ち名士へ記念にと罷り出る
 筆と墨硯變へても下手は下手
 感情が激し硯の水がゆれ
 懐しさ硯に父の癖を知る
 次に書く文字を硯に書いて見る
 ジツと見る硯思案が纏らず
 よい文句浮かはず硯また乾き
 ウキンドに飾られてある硯箱
 初等科の初めて硯持つ重さ
 履歴書へ硯は又かとも思ひ
 硯箱置場に困る子澤山
 四ツ辻で硯でかせぐ表札屋
 お土産の硯重く頂戴し
 女事務硯綺麗な儘であり
 大戦果硯を洗ふ句が生れ
 亡き姉が優等で貰つた硯箱
 硯石今日は嬉しい墨をすり
 硯もう今日の出来事知つて居る
 親の代からの硯に有るくぼみ
 女事務硯の水へ使はれる
 硯石個性を見せて減つてゐる
 金策の硯重たい墨をすり
 バラ一輪硯の脇へ置く妹
 お清書の硯眞顔ですり下し
 書置きと知つた硯のあわてやう
 硯いま金策らしい顔と知る

波人 猪三郎 三丸 叮紅 惡源太 青嵐 蛙柳 神風 初惠 抱逸 美奈子 正朗 治男 東狂子 小城子 葉光 彌生 同 千斗 同 武士 同 春童 同 二

急性・慢性

化膿症

0 P I

アベルジル錠

内服短期奏效・病原療法創

丹毒・濕疹・瘰癧
 外傷化膿・乳腺炎
 扁桃腺炎・中耳炎
 蓄膿症・齒槽膿瘍

急性・慢性 トラホーム
 急性・慢性 淋 疾
 化膿性 婦人科疾患

：等に對し本剤は内服により化膿菌克服作用を發揮す。従つて、止膿・止痛・解熱を迅速ならしめ、根元的なる治癒を促進せしむ。又、副作用少く應用は安全、容易である。

製造元
 山之内製薬株式会社
 東京市日本橋區小舟町二
 大阪市東區高橋五

協川のジュー



催

▼本社主催六月旬會は六日午後六時御津八幡宮に於て開催▼松坂俱樂部麻生路郎川柳講座は七日廿一日午後一時▼有恒俱樂部川柳講座は十一日廿六日午後五時開催▼警察病院川柳會は十六日午後四時開催▼尼崎住友産報川柳會は十日午後五時開催▼瀧信病院では廿五日阪大川柳會を迎へ阪大通信合同川柳會を開催何れも路郎師出席▼川維尼崎支部六月旬會は廿八日午後六時尼崎昭和荘に於て開催▲美氏出席▼川維神津支部六月旬會は十三日午後七時乙谷乙平氏居に於て開催▼堺支部六月旬會は廿四日午後一時大安寺に於て開催

消息

▼岩崎柳路氏(不朽洞會員)は新に開設された靈園工會議所の議員に當選された▼浪玲之介氏(不朽洞會員)は東京大阪間を絶えず往復、旅宿から、有上京感の漢詩を寄せられた▼村上角堂氏(不朽洞會員)は六

月中旬、近親の納骨のため身延山久遠寺靈坊へ▼鈴木九波氏(不朽洞會員)は六月八日松江の本庄快哉氏の訪問をうけ快談された由▼橋本綠雨氏(不朽洞會員)は松本市の石曾根民郎氏(不朽洞會員)を訪問され歸途金澤へ足を伸ばされた▼戸倉普天氏(不朽洞會員)は六月三日丹波へ歸郷され七日まで休養されてみた▼津路紅多呂氏(不朽洞會員)は明朗快活に軍務に勉勵されてみられる▼米本貴志子氏(不朽洞會員)は六月中旬病床を離られた由▼伊藤東亞氏(小郡)は下關運輸事務所庶務係へ轉勤▼堀川正男氏(廣島)は下關用品部長に轉任▼橋本克海氏(宮崎縣)は本年一月限りで菓子商を廢業、國策に沿うて農工開拓の壯圖にかつれた▼村田周魚氏(東京)の御令聞は御病氣御加養中との事一日も早く健康を取り戻されん事を祈る▼吉田水車氏(不朽洞會員)は六月十二日來社された▼六月三日路郎主幹とアート編輯部員とが戸倉普天氏(不朽洞會員)に招かれ同氏の郷里丹波を訪れ山又山の懐で俗塵を洗はれた▼「週刊朝日」に一月以降各週掲載されてゐた路郎師の時事川柳と解説は六月廿八日發行號で打切

られた▼路郎主幹は「戦争と川柳」と題し四日間にわたり大阪新聞の學藝欄に各時代を通しての戦争と川柳について執筆された▼路郎主幹は六月十七日瀨伯河上一也氏を奈良に訪ねられた▼路郎主幹は六月六日朝當日夕刻に開催される本社旬會出席までの時間を利用して郷土研究家小谷方明氏を泉州上神谷にたづねられた▼尼縁之助氏(島根縣)は公務のため二十七日朝三瓶山へ出張された▼戸倉普天氏(不朽洞會員)は廿六日院庄作樂神社へ参拜された▼高橋月雨氏(大連)の「川柳大陸」では、その五十號を記念に皇軍慰問特輯號として刊行される由▼堀内敏郎氏(長野縣)は志賀高原の丸池からホテルを寫生した葉書で旬信を寄せられた

▼百合野潮流氏(下關)は六月二十四日長男昭君を儲けられた。

弔

▼山内凡狗氏(島根縣)は六月八日永眠された氏は鏡川支部幹事尼縁之助氏を補佐し支部の世話役を擔任されてゐたので鏡川支部のためにも惜しむ可き人である謹んで哀悼の意を表す

轉居

▼國弘半休氏(不朽洞會員)は下關市新地町鐵道官舎三四ノ五へ▼大西光陽氏(大阪)は住吉區濱口中一丁目三一へ▼丸尾潮花氏(不朽洞會員)は大阪市西成區潮路通一ノ一へ▼中西おさむ氏(不朽洞會員)は東京市中野區塔の山町三十四番地へ▼澤潤一氏(兵庫縣)は東京市杉並區荻窪三ノ四七三松荘内へ

改號

▼市川童顏氏(岐阜)は周峰と改號された

正誤

五月號三十一頁 兼題「上京」の句「銀がらの靴」は「靴」と訂正

社の週覽板

★不朽洞會新會員發表
山口縣 長野 井蛙氏
(市多樓氏紹介)

Advertisement for 'Izumi Mame' (伊豆マメ) featuring a large triangle with a flower and the text '伊豆マメ' and 'スツキリ'.

不朽洞會總會豫告

★姫田夕禪氏は家事の都合により不朽洞會を退會される事となつた
昭和十七年度不朽洞會總會を來る八月二日午後一時―五時(議事其他)午後五時半―八時(懇談)に開催することとなつた。役員の選舉其他重大なる協議事項があるので遠隔地の會員諸氏も萬障繰合せ御出席ありたく、準備の都合もあらうと思ひ豫告することとした。
會場其他詳細は追而案内状により豫承された。



廻轉椅子

逐號好評感謝の外なし。

月評「川柳一卜筋」を本社で開く。丹路、興楽、豆秋、孤蓬一笑といふ顔柳である。紫香はこどもが悪いので、私は蘭桶と痔のため缺席した。幽王が筆記の勞をとる。

會て輕妙な河童の句で讀ませしめた前田五健氏は本號へ「昔の川柳にあらはれた河童」を發表。

泉融々氏の「都心隨筆」で本號の巻頭を飾り得たことは大きなよろこびである。

曹天氏に招かれて、アトトと共に、六月三日、一泊かけて、丹波の沼貫村小野といふところへ出かけた。曹天氏の本宅は山を背にして幾棟か並んでゐた。

私けこいで土地のインテリと樂しい雑談を交はして来た。小山文三氏（曹天氏のペンネーム）の隨筆に書かれた猪耳を見せて貰つたり、猪をうつ、種子ヶ島や村田銃などの腰を拂つて、い

ろんな懐舊談を聞かされたりして俗塵を洗つた。自給自足の精神から發足して出来た炭焼籠や山水を利用して夜となく日となく米を搗く水車も見た。古い民俗談も聞いた。ホントにいい勉強をして来た。

六月六日に泉北郡上神谷に、郷土研究家の小谷方明氏を訪ねた。小谷家のすぐ背後は山に續いてゐる。そこは小谷城址だそらだが、つはものどもの夢の跡で、今は蔵や山百合で自然の力の偉大さを顯現してゐた。祖先の小谷城主は吉野朝の時には天野山の裏木戸の備へをうけたまはつた家柄である。當主で三十九代になるとか、斯うした歴史の中に半日もひたり得たことは丹波行と共に近ごろのよろこびである。

ある人のたよりに、「日川協を解散、文藝報國會に統合、俳句の内へ入れるとか雀郎が九段を訪れ其代表になつて呉れろと申入れたとか、伎氏は多分不賣成であつたらうと思ふ、川柳の獨立性が薄くなるわけ、詳細は

小生知らず、然し雀郎などの裏面運動は此邊なるものと察せられ候」とある。御心配は御無用である。日川協は解散しても川協は小指ぎもしない。どうせ川協を眞似て生れた日川協である。こん度は俳句の眞似をしてゐれば世話はない。一ト足先きに俳詩の人たちが俳句の椅子に半分腰をかけてゐるから、その横へでも腰をかせさせて貰へばいいだらう。ホントに川柳が判つてゐない連中が幾らあつて何んの役に立つものではない。彼等がゐなくなれば、川柳の世界が清淨にこそなれ、川柳の獨立性が決して決して薄くなる譯のものではない。日川協の解散と同時に夢の覺める連中も相當にゐる筈だ。雀郎氏等と心中する連中がそとサラにある筈がない。一昨年秋に雀郎氏が頼冠りをして來阪した時の話も俳句の第四部に入る話だったので彼にその非をさとしてやつたがまだそんな夢を見てゐるのかも知れない。私が御免を蒙つた原因はそこにあるのだ。俳句が今日の俳句になるまでにはどれだけの犠牲を拂つてゐるか知れないのだ。眞に川柳を愛するならば川柳のために、どんな大きな犠牲でも拂ふだけの覺悟がなくてはならぬ。餘所の御馳走に目をつけるなんざも淺間し丁見

だ。たとへ川柳の畑が荒蕪地であらうとも自分は汝々として自分の畑を耕して行くのだ。石にあたる鉄の雲が、今に見ろ、今に見ろと響いてくれるその樂しさに生きて行くのだ。彼岸に達することが出来ないで、いきを引き延ばすことがあつても、私は笑つて瞋目し得る覺悟はあるのだ。文藝報國會だけが報國の誠を致してゐるのではない、ことを知らねばならぬ。日本は今大きな戦を闘つてゐるのだ。くだらない看板の塗るかへにはかり腐心してゐる時ではない。日川協が潰れやうが、俳句の配下にならうが、眞實に生きる川柳人の知つたことではない。しかしながら文藝報國會から締出しを食つた日川協としては確に重大問題であらう。幹部諸氏は總辭職をしてその責をとらねば喇だが果してその勇氣があるか、それさへも疑はしい。何れ内容がハッキリしたら筆を執るつもりだ。

麻生路郎著

新川柳評釋 定價〇・八〇

本筋の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不離の評釋がしてある。

石曾根民郎著・麻生路郎序

句集 大空 定價一・〇〇

著者は信州の人、心の底にじつと懐いてゐたものを素直に吐き出したといふ個人句集。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫

果卵の遊び 定價一・〇〇

名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山蒐めてある。漫畫三十二篇挿入。

阪大川柳會編集・麻生路郎序

句集 大川端 定價一・〇〇

大阪帝國大學醫學部附設の阪大川柳會が編纂した會員の傑作集

堺市出島海岸 發行所 不 朽 洞 振替大阪三〇三九二番 通二二一八二



セ・ミ・ノ・ハ・タ

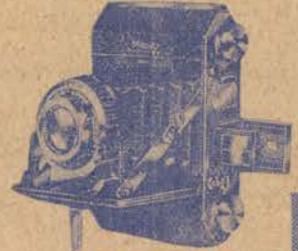
代表的國産カメラ

プロニー
16枚撮り

Ⅱ型 F4.5付
¥ 117.00

F3.5付
¥ 141.00

距離計
¥ 21.00



(カタログ呈
郵便券十銭)

浅沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壘代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

丸形・角形・小判形・
組立式各種・薬品・食
料品・菓子等の容器と
して最適

電話事務所用 天下茶屋
工場用同
五八〇〇二番
五八〇〇三番
五八〇〇四番

東回

スピーザ

ワイシャツ

婦人服地

その他

大阪北浜二丁目片倉ビル

電話北浜六三六(4)番

安産

のために

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 監査
榎林醫學博士 推奨



片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

ブダカルシウム錠

大阪道修町

和田卯助商店

細菌性・化膿性疾患に

テラポール錠



感冒・扁桃腺炎・中
 耳炎・尿路疾患・丹
 毒・肺炎・齒槽膿漏
 婦人科疾患・面疔・
 其他細菌性疾患に

川柳雑誌 第三三三號
 大正十三年三月三十一日出版
 編集者 川柳雑誌編輯部
 印刷者 川柳雑誌印刷部
 発行所 川柳雑誌發行所
 代價 三〇銭